

---

# 40%の未来

じえにゆいん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

40%の未来

### 【Nコード】

N8501H

### 【作者名】

じえにゆいん

### 【あらすじ】

発症すれば致死率は100%。そして、20歳までに発症しないでいられる確率は40%。

『塚原くるみ』は、そんな病を抱えながら生きてきた。人と人とのつながりの全てを断ち切って。この、目に映るもの全てが灰色の世界で。

そして彼女は、とあるビルの屋上を最後の場所を選び……『彼』に出会った。

## 第1話 出会い

夏休みが終わったばかりの、9月の太陽の元。

時折吹き抜ける風は、153センチしかないわたしの身体を一瞬だけ包み込んで、留まることなく去っていく。

涼しいと思うのは、ほんの一瞬。

風が去れば、相も変わらず太陽が照りつけ、厳しい残暑を否応なく感じさせる。

制服のスカートのポケットから、ハンカチを取り出して汗を拭い、そのハンカチをポケットにしまいながら、ふと空を見上げてみる。視界に飛び込んでくるのは・・・灰色の空。

それが、例え雲一つない澄んだ青空であっても、わたしには、乾いた灰色にしか感じられない。

遠い昔の記憶にある風景は色鮮やか。

草木の緑も舞い散る桜のピンクも・・・ステキな景色は、いつだってわたしの心をやさしくノックしてくれた。

でも、今のわたしの心には、どんなステキな景色も響かない。

5年前の『あの時』から、わたしの心はそうなった。

仕方がないじゃないか。

そうしなければ、『あの時』に、わたしの心は碎け散っていただろう。

わたしは、みんなと違うから。

みんなと同じようには、生きられないから。

わたしは、みんなと違う世界に、たった一人で生きている。  
この世界は、全てが灰色・・・灰色の世界。  
今のわたしは、灰色の世界の住人。

名は塚原くるみ、17歳、城南高校2年生。

毎週水曜日は、通院の日。

わたしの、5年前からの習慣だった。

午後1時半。

わたしは、通いなれてしまった、いつもの病院の5Fにいた。

午前中の授業が終わってから、早退してまっすぐ来たので、制服姿のままだ。

城南高校の制服は、飾り気のないカッターシャツに藍色のブレザースカート。

今時の制服にしては、あまりに可愛げがなくて、ほとんどの生徒には不評な制服だった。

カッターシャツのポケット部分には、校章マークが刺繍された布を縫いこむ規則になっている。

わたしの胸ポケットに縫い付けられた校章マークは、黄色だった。

これは、今年の2年生は『黄色』という意味を表す。

ちなみに、今年の3年生は『青色』、1年生は『緑色』だ。

そして、来年になれば『黄色』が3年生を、『緑色』が2年生を、

『青色』が1年生を表すことになる。

その胸ポケットには、いつも薬袋を入れてある。

月に1回もらう小さな錠剤。

一応、食後に飲まなくてはいけないことになっているが、時々飲み

忘れたりもする。

効能は、薬剤師に説明を受けたことがあるが、もう覚えていない。まあ、飲み忘れても身体に何の影響もないようだから、気休めなんだろうと思う。

検査室。

今、わたしがいる5Fには、いつもわたしが検査を受けている検査室がある。

検査には、さほど時間はかからない。

検査が終わった後、主治医がその結果を教えてくださいただ。

今日もまた、いつもの主治医が、笑顔交じりに言う。

「今日の検査の結果も問題ありませんでした。また来週来てくださ  
いね。」

先週も先々週もそのまた前の週も、同じセリフを同じ表情で。  
うんざりだった。

毎日が憂鬱。

ただ、なんとなく時間が流れ、1日が過ぎ去っていく。

わたしは、まるで魂のない人形のように振舞うだけ。

こんな無味乾燥な日々を、いつまで過ごせばいいのだろう。

死ぬまで？

それはいつ？

ならば・・・もう終わらせてもいいじゃないか。

今日、終わらせればいいじゃないか。

ずっと頭の片隅にあったこと。

それが急に具体的になったのは、昨日、とある雑居ビルを見つけたから。

そこが、『何もかも終わらせる』のに最適な場所だと思った。

わたしは、病院のエントランスを出て、その雑居ビルに向かう。病院から離れること200メートル程度。

空き室を示す「入居者募集中」の壁紙が、ベタベタ貼られた雑居ビルだ。

どう考えても、制服を着た学校帰りの女子高生がうろつくようなビルではないだろう。

周りに人の目がないことを確かめ、エレベーターのボタンを押す。

程なく開いたエレベーターの中に乗り込み、10のボタンを押すとエレベーターが動き出して、貧血の時の様に頭が少しクラツとした。10階は「入居者募集中」紙が貼られた部屋が多く、そうじゃない部屋も、この時間帯には開いていない。

フロア全体が、全くと言っていいほど人気がなかった。

エレベーターを降りて、右に曲がる。

上に昇る階段と、その階段を使わせないようにする鉄鎖と、立ち入り禁止の札。

わたしは、かまわずに鉄鎖をくぐり、階段を昇っていく。

その終点には、重そうな鉄の扉。

普通ならカギがかかっていそうなものだが、このビルの管理はされていないに等しいので、カギはかかっていない。

扉が「ギイイ」と音を立てて開く。

わたしは、無事屋上に出た。

とたんに強い日差しが照り付けるが、風も幾分強い。

自分で見ても、明らかに野暮ったいと思えるショートカットヘアがあつという間に風にぐしゃぐしゃにされる。

わたしは、気にすることなく、一歩ずつ一歩ずつ、縁の金網に向かって歩みを進めた。

あと3歩程度まで来た時、その声が聞こえた。

「どこに行こうとしているんだい？」

わたしは思わず立ち止まった。

空耳？

いや、確かに聞こえたような。

でも、こんなところに人がいるわけが……。

「そっちにいくと危ないよ。」

後ろから聞こえた！

ハッと振り向くと、年の頃20代中頃程度に見える男性が、こつちを向いて立っていた。

黒い無地のTシャツに青いジーンズ……髪の毛はうっすら茶髪にも見えるが、すごく繊細そうな髪の毛で、日のあたり具合で茶髪に見えているのかもしれない。

そして、銀色のフレームのメガネ。

メガネのレンズに日が反射して、瞳が見えない。

だが、その人は、確かにわたしを見ていた。

「それ以上、そっちに行かないほうがいい。」

「……。」

ここは、昨日、わたしが見つけた『自殺に最適な場所』のはずだった。

まさか、今日に限って邪魔が入るなんて、思いも寄らなかった。

仕方なく、わたしは男の方を向く。

もちろん、今さらやめる気などさらさらない。

わたしは、少しずつ後ずさりしながら、金網までたどり着き、すばやく金網を飛びえればいいと思っていた。

しかし、男は右手を差し出しながら、少しずつこちらに歩み寄ってくる。

「もし、飛び降りつもりならやめてほしい。」

気の利かない説得だ。

わたしは、なおも近づいて来ようとする男に、精一杯の冷たい声をかけた。

「それ以上、近づいて来ないで。」

男の歩みがピタリと止まる。

これでいい。

後はわたしが後ずさるだけ。

この距離なら止められっこない。

だが、男はあきらめずに言葉を吐く。

「本気かい？」

肯定。

そういう意味で、わたしは少しばかり微笑んだかもしれない。ためらうことなく、わたしはさらに一步後ずさった。

男の表情・・・メガネの奥の瞳は、相変わらず見えない。

だけど、顔つきが厳しくなったような気がした。

さらに一步後ずさったわたしは、ついに金網までたどり着いた。

男との距離は10メートル以上ある。  
どう考えても止められる距離じゃない。  
後は、わたしのお腹ほどしかない金網を越えれば、もう誰も止められない。

金網に両手をついて、いつでも飛び降りることができるように準備する。

地上から吹き上げてくるような風が、わたしの制服と髪をはためかせた。

風切り音の合間に聞こえる車のクラクションとセミの声は、まるで遠い世界から聞こえる音のように感じる。

それは、今いる場所から地上までが、いかに離れているかを意味していた。

この高さから飛び降りれば、確実に・・・死ぬだろう。

思えば、あの12歳の夏から、もう5年も経っていた。

ただ、ひたすら孤独に耐え、抜け殻のような日々を過ごしてきた。

そうせざるを得なかった。

そんな日々から逃げるために、今、わたしが選んだこの方法はきつと正しいはず。

そう思った瞬間、パチンという音で、わたしは我に返る。

男の右手には、折りたたみナイフが握られていた。

そして、男は、おもむろに左手をこちらにまっすぐ向け、その左手首にナイフの刃を当てる。

「！」

わたしは、声にならない悲鳴をあげた。

「キミは・・・遭される者の辛さを知るべきだ。」

何を言っているんだろう？

ワケがわからない。

自殺志願者を目の前にして、自分が自殺を試みるなど聞いたこともない。

ナイフを持った彼の右手は、かすかに震えていた。

瞳を見て本気がどうかを計ろうとしても、メガネに日光が反射して瞳が見えない。

そして、次のわずかな一瞬。

日光の当たる角度の変わったメガネの奥に、彼の瞳がはつきり見えた。

それは、本気の瞳だった。

「やめてっ!」

本気だと確信したのと、叫んだのは、ほぼ同時だった。

真っ赤な血が吹き上がる様を想像し、同時に伴うであろう激痛を想像し、わたしは両手で顔を抑えてしゃがみこんだ。

どのくらい時間が経っただろうか。

おそらく、ほんのわずかな時間だったはずだけど、恐ろしく長く感じた。

恐る恐る顔を上げると、彼は、左手首を押さえてうずくまっている。左手首を押さえる右手からは、確かに赤い血が見えた。

わたしは、スカートのポケットからハンカチを取り出しながら、脱兎のごとく駆け出し、男の元で跪く。

思ったより出血は多くない。  
わたしは、患部にハンカチを巻こうとした。  
彼は、そっと右手を左手首から離す。

「　　っ！」

やはり出血はそれほど多くはない。  
だが、出血する傷の他に、幾筋もの同じようなキズ。  
もちろん、今日出来たものではない。  
紛れもなくリストカットの痕だ。

一瞬作業を忘れたが、わたしは我に返って、ハンカチを左手首のキズを覆い隠すように巻いた。  
白いハンカチに赤い血が滲み出す。  
そして、思わず彼の顔を見た。

目があった。

知性と意志の強さを感じさせる、涼しげな印象を持った瞳。  
メガネをかけていることもあいまって、冷静沈着そうな雰囲気を感じるが、同時に、どこか儂くて消え入りそうな雰囲気も感じる。  
目を離すタイミングがつかめず、見つめたまま黙っていると、彼は痛みを我慢しながら笑顔で言った。

「やめてって・・・言ってくれたね・・・。」

彼の額から、汗が一筋流れ落ちる。  
同時に、止まっていた時間が動き始めたように、遠くからセミの鳴き声が聞こえた。

## 第2話 オレンジ

男は「あきしきこうた秋月幸太」と名乗った。

そして、彼は、当然のようにわたしの名前を聞いてきたが、あまり答えたくなかった。

でも、左手首に巻かれたハンカチを見ると、やっぱり心苦しい。それは、わたしのために出来たキズだった。

「・・・塚原くるみ。」

彼に対する負い目が、わたしの口を開かせていた。

成り行きで、仕方なく名乗ったものの、今さら他人と関わって何になるだろう。

ずっと、他人と関わらずに生きてきたというのに。

「つかはらくるみさん・・・か。教えてくれてありがとう。」

彼は、笑顔で言った。

教えてくれてありがとう、というのも珍しい言い回しだと思った。普通は「いい名前だね。」とか言う所じゃないだろうか。

ただ、今の状況にはピッタリかもしれないけど。

そして、彼は言葉を止めて、例の涼しげな瞳でわたしを見る。

吸い込まれそうな瞳だと思った。

意志の強さを感じる瞳。

だけど、同時に儂さも感じる瞳。

見つめ合ったままの沈黙に耐えられず、視線をそらそうとした時、彼は言った。

「とりあえず、日陰に移動しようか。」

そういえば、9月とはいえ残暑の日差しが強い。自分の額に、じっとり汗が滲んでいるのに気づいた。よく見ると彼も汗だくだ。

この屋上の出入り口近くに貯水槽がある。

その貯水槽が作る日陰に、彼が体育座りのような感じで腰掛け、わたしは1メートルほど離れたところに同じように座った。彼は、少し苦笑いを浮かべている。

わたしは、他人に対して常に壁を作ってきた。

仕方ないじゃないか。

他人とつながりを持たず、また辛い思いをするのだから。5年前のあの時のように。

わたしは、体育座りをする自分の膝の間に頭をうずめるようにして、まっすぐ前方の遠い景色を見つめた。

となりに座る彼と、視線を合わせないように気を付ける。

彼は、そんなわたしを見ながら言葉をかけてきた。

「まだ・・・死にたいと思ってる？」

思っている。

でも、今日はもうやる気を失くしてしまった。

場所を変えてもう1回・・・なんて出来そうもない。

一応、そんな気持ちは表に出さないように、わたしはあえて返事をしなかった。

返事がないのは肯定だと思ったのだろう。

彼は、目を合わせようともしないわたしを見るのをやめ、視線を正面に見える街並みに移した。

風が、汗の滲んだわたしの額を吹き抜けていくのが心地いい。

彼がしゃべるのをやめたので、聞こえてくるのはセミの鳴き声と車のクラクシヨンの音だけになった。

その現実感のなさが、この最上階だけが別世界であるかのように感じさせる。

それから、会話のない状態がどれだけ続いただろうか。

その間、彼もわたしも、１メートルほど離れて、同じ方角を向いて座っているけど、お互い視線は正面を向いたままだった。

どうして、わたしはこんなところでこうしているんだろう？

そんなことを考えて、ふと、彼の左手首にあったりストカットの痕のことを思い出した。

すぐ横に座っている彼の顔をチラリと見る。

彼は、まっすぐ遠くを見つめたままだ。

その瞳からは、前向きな意思を感じる。

少なくとも、自殺を考えるような人の目には思えなかった。

視線を左手首に移すと、赤い血の滲んだ白いハンカチが目に入る。

何故この人は、こんな怪我をしてまで、わたしを止めたんだろう？

正直言つて、わたしはその気持ち理解できなかった。

わたしの視線に気づいた彼は、突然わたしの方を向いた。

・・・また目が合ってしまった。

そして、彼は、わたしが左手首を見ていたことに気づくと、その左手首をさすりながら照れくさそうに言った。

「僕もね・・・以前自殺をしようとしたことがあるんだ。」

彼は、一度合った視線を、前方の街並みに移してから答えた。

「いろいろと辛いことがあって、それらから逃げるためにね。」

ドキツとした。

わたしもまた同じような動機だったから。

「キミは・・・何故死のうと思った？」

彼は、再び視線をわたしに戻して聞いた。

メガネの向こう側にある瞳は、優しそうで涼しげだ。

わたしは、わざと視線を外しながら、つぶやくように答える。

「先天性循環器機能不全症候群・・・って聞いたことありますか？」

彼は、視線を落とし、右手の親指と人差し指で、鼻の頭をこするようにして考え始めた。

・・・どうやら考える時の彼のクセらしい。

「・・・ごめん。聞いたことがない。」

そうだろう。

国内でもめつたにない奇病なのだから、知らないのもムリはない。医者が言うにはこんな病気だ。

この病気は先天的なものであり、その発生確率は百万人に一人と言われていること。

発症しなければ、基本的に健康体であること。（とはいえ、中学を卒業する頃から、わたしは極端に気管支が弱くなった。それが、この病気のせいかどうかは医者も判断できないとのこと。）

発症1週間前くらいに、徴候が出ることがあること。  
発症すると、主に心臓及び肺の一部の細胞が硬質化し、臓器の機能不全を起こすこと。

そして、発症すれば致死率はほぼ100%であること。

毎週の検査で、徴候があるかどうか調べてもらうものの、徴候がないまま亡くなった症例もあるらしい。

どちらにしろ、発症したら・・・そこで死ぬ。

最後に、わたしは最も大事なことを付け加える。

「そして、20歳まで発症せずに生き延びる確率が40%・・・。」

わたしは、彼と視線を合わせることなく、淡々と説明する。

彼もまた、口を挟むことなく、ただずつとわたしを見ていた。

なおも、わたしは続ける。

わたしは、みんなと違うから。

みんなと同じようには、生きられないから。

だから・・・いつも孤独、全ては灰色。

そんな灰色の世界に生きることが、どれだけの意味を持つというのだろうか？

もう、いいじゃないか・・・と思う。

きつと、生きることによって疲れてしまったんだ。

「疲れちゃった・・・んだよ。」

わたしは、最後にもう一度本音を繰り返して、また前方の遠くの景色に視線を戻す。

その後、どちらもしゃべることなく、どれくらいの時間がすぎただろう。

すでに、太陽は傾きかけていた。

そこで、ようやく言葉を発したのは彼の方だった。

「ひとつ、聞いていいかい？」

「？」

「あの時、何故キミは『やめてっ！』って叫んだの？」

「え……。」

「何故キミは、このハンカチを巻いてくれたの？」

彼は、赤い血の滲んだハンカチが巻かれた左手首を掲げながら、わたしの目を直視して言った。

言われてみれば……何故だろう。

別に気にしないで、飛び降りても良かったはずなのに。

どうして、あの時『やめてっ！』って叫んだんだろう？

どうして、あの時、ハンカチを巻いてあげたんだろう？

考えても、なぜか答えが見つからなかった。

そんなわたしの様子を横目に、彼はおもむろに立ち上がり、わたし

の目の前に立った。

どういうわけか満面の笑顔で。

『その答えを僕は知っている』と言わんばかりに。  
混乱しかけたわたしの思考。

次の瞬間、目の前に立つ彼が、そっと右手をわたしに差し出した。

「・・・？」

この差し出された右手の意味が、とっさにはわからずに、ポカンと  
してしまふ。

ただ、そんなわたしのマヌケな姿さえ、彼の笑顔が包み込んでくれ  
ているような気もした。

「キミに、見せたいものがあるんだ。」

見せたいもの？

わたしは、自分の心臓の鼓動が早くなったのを感じながら、差し出  
された右手と笑顔の両方を、交互に見比べた。

彼の意図が全く読めない。

にもかかわらず、わたしは魔法にかけられたように、差し出された  
右手を両手でつかんでしまった。

途端に、ギュッと強い力で引つ張り上げられ、わたしは彼に立たせ  
てもらった格好になった。

彼は、そのままわたしの手を引いて、屋上の真ん中辺に連れ出す。

彼は、大体175センチくらいの身長で、細身に見えるが、その見  
かけから受ける印象以上に、彼の手は大きく感じた。

その大きな手が、華奢なわたしの手を、優しく握ってくれているの  
がわかる。

あまりに予想外の展開に、わたしの胸は、普段ではありえないほど

ドキドキしていた。

そして、陽が傾いて長くなった日陰を出た瞬間、眩しい太陽光がわたしの目に突き刺さった。

反射的に空いている右手を、目の上にかざす。

「　　っ！」

なんとということだろう。

声にならない感嘆の声。

それは鮮やかな夕景・・・美しいオレンジ色。

大小のビルが入り混じったジオラマのような街並みは、鮮やかなオレンジ色に染め上げられていた。

ちようど正面に浮かぶ大きな夕陽は、全てのオレンジ色の源泉。

その大パノラマは、圧巻の一言だった。

生まれ育ったこの街に、こんな雄大な景色があったなんて。

彼の右手とわたしの左手は繋がれたまま。

でも、わたしは、その手を振りほどくことも、言葉を発することも出来なかった。

この強烈なオレンジ色に、ただ見入った。

「ここから見る夕陽は、僕のお気に入りだ。」

となりで一緒に夕景を眺める彼が言う。

「心に・・・響いただろう?」

わたしは、目の前のオレンジ色に圧倒されて返事が出来なかった。

でも、今のわたしの顔を見れば、その答えは明らかだろう。

「それが『生きている』ってことだ。」

まるで、それが結論であるかのように、彼は言い放った。  
もちろん、わたしは反論できなかった。

次第に落ちていく夕陽。

あれだけ鮮やかだったオレンジ色が、少しずつ黒い影を濃くしていく。

流れていく時間を感じながら、わたしの胸は、未だにドキドキしていた。

どうして、こんなにドキドキするんだろう？

目の前のステキな夕景のせい？

それとも・・・左手に感じる彼の手のぬくもりのせい？

そんなことを考えながら、今は、目の前にあるオレンジ色の洪水を、ただ見入ることしか出来なかった。

### 第3話 昼休みの憂鬱

翌日。

城南高校2年A組の教室で、わたしは昼休みの時間を過ごしていた。窓際の自分の席で読書、がいつものわたしの休み時間のスタイル。周りを見渡せば、机に座ってしゃべりこむ女子生徒たち、追いかけっこするかのように走り回る男子生徒たち、その他めいめいの方法で昼休み時間を満喫する生徒たち。

その中であって、わたしは、まるで異空間に隔離されているかのようだ。

わたしから、誰かに話しかけることはない。

そして、他の生徒たちから話しかけられることもない。

ふと、文庫本から目を離し、空を見上げる。

空一面の鉛色は、今にも泣き出しそうだった。

午前中は、比較的青空もあったのに。

でも、それはどうでもいいことのはずだった。

例えば、青空が広がるうと、曇り空だろうと、わたしにとっては灰色の風景にしかすぎないのだから。

それなのに、昨日見たオレンジ色の夕景は、あの灰色じゃない風景は、一体なんだったんだろう？

12歳の夏。

あの時から、わたしは灰色の世界に佇んでいる。

あれから5年。

ずっと、目に見えるもの全てが灰色だったのに。

突然、心臓が「ドクン」と揺れる。

12歳の夏のことが頭をよぎるだけで、いつもこうなる。

・・・いけない。

あの時のことは、思い出したくないよ。

わたしは、ムリヤリ思考を中断して、頭を軽く振る。

どうやら、鉛色の空を見つめながらボーっとしてしまっていたみたいだ。

気を取り直して、わたしは、もう一度文庫本に目を戻した。

今の昼休み時間も含めた休み時間を、わたしは全て読書に費やしている。

別に、読書が好きなのじゃない。

一言で言えば、間が持たないから。

つまりは、時間つぶしだ。

さらに言うなら、読書をしていれば誰も話しかけてこないから。

今となつては、読書をしていなくても誰も話しかけてこないだろうけど。

真剣に文庫本を読んでいるわたしからは、きつと「話しかけないで」というオーラが色濃く出ていることだろう。

わたしは、誰にも話しかけてきてほしくない。

だから、読書は都合が良かった。

今、わたしが読んでいる本は、主人公の少年が仲間と一緒に宝探しに出かける冒険活劇。

途中、泣かせるエピソードを交えながら、仲間を増やして、いろいろなテキと戦い、最後に宝を見つけてハッピーエンド、というストーリー。

もう何回か読んだものだから、だいたいのストーリーは頭の中に入っていた。  
それでも繰り返し読むのは、きつと時間つぶしのためだけじゃないと思う。

小説を読む時、わたしは主人公に感情移入する。

そして、主人公が新たな仲間を得た時、わたしも仲間を得たような気になる。

それは、現実では絶対にありえないことだけど、妙な高揚感を感じることが出来て心地よかった。

喧嘩をする時もあるけれど、困った時には命をかけて助け合う。

でも、決して馴れ合わない。

そんなステキな仲間たちと、わたしも一緒に冒険する。

でも、所詮それは本の中でのことに過ぎない。

本を閉じれば、わたしだけが現実に取り残される。

わたしは、主人公とは違う存在なのだと認識させられる瞬間。

魅力的なキャラクターが縦横無尽に活躍するこの物語が、比較的気に入ってはいた。

けれど、わたしにないものをたくさん持っている主人公をうらやましく感じ、ほのかに嫉妬の感情すら抱いてしまうことがあるのが、気に入らない副産物だった。

でも、今日は小説にのめり込めないでいる。

あのオレンジ色が、頭を占拠しているかのように。

しおりも挟まずに本を閉じて、また鉛色の空を見上げる。

周囲は、あい変わらず昼休み時間の喧騒に包まれていた。

高校に入学した当初は、わたしに話しかけてくる生徒が何人もいた。

希望に満ち溢れた新入生たち。  
わたしとは違う人たち。

友だちを作る気はなかった。  
いずれ、辛いことになることがわかっていたから。  
それが12歳の夏に得た教訓。

話しかけられても答えない。目を合わせない。  
まるで、わたしは異世界の人間であるかのよう。

わたしに話しかけようとする生徒がいなくなるまで、それほど時間はかからなかった。

普通なら、イジメの対象にでもされていたかもしれない。  
でも、そうはならなかった。

一度だけ、トイレで、わたしのことを話すクラスメイトの会話を聞いた。

「ねえ。あの塚原くるみってコ。長くは生きられない病気なんだって。」

「ええ〜。ウソオ〜！」

「ホントらしいよ。小中で学校が一緒だったって娘に聞いたもん。」

「それであんなに暗いんだあ。少し納得。」

「あんまり関わらない方がいいよね。」

「そっだね。」

病名は、先天性循環器機能不全症候群。

20歳まで生きる可能性は40%。

あまり正しくは伝わっていないようだけど、それで十分だ。

他のみんなも、わたしの病気のことを、大なり小なり知っているの  
だろう。

わたしは、みんなと違うということ。

鉛色の空を見上げながら、ため息を一つ。

本当なら、わたしは、もうここにはいなかったはずだった。

それなのに、どうしてわたしは、ここでため息なんかついているん  
だろう。

赤い血の滲んだ白いハンカチ。

秋月幸太と名乗る、リストカットの痕を持つ男性。

そして、あの鮮やかなオレンジ色の夕景。

「そういえば、年も聞かなかったな。」

わたしは、心の中だけでなく、頬杖をつきながら実際につぶやいて  
いた。

かなり年上に見えたが、何歳だろうか？

涼しげな瞳。

銀色フレームのメガネ。

少しずつ、彼の記憶が鮮明になっていく。

そもそも、なんでわたしを止めたんだろう？

それも、あんな無茶な方法で。

『キミは……遺される者の辛さを知るべきだ。』

手首を切る直前、彼は確かにこう言っていた。

普通なら、自分の手首を切つてまで自殺を止めようなんてしないはず。

せいぜい何かキレイごとを言つて、それでダメなら逃げていくだろう。

いくら考えてもわからない。

どうして、昨日見たオレンジ色の夕景だけが灰色じゃないんだろう？

どうして、彼は、自分の手首を切つてまでして、わたしを助けたんだろう？

答えは何一つ出ることではなく、代わりに出るのはため息ばかり。

なんかヘンだ。

わたしが、他人のことを考えているなんて。

ずっと、他人に興味を持たないように生きてきたのに。

やがて、昼休みの終了を告げる予鈴が教室のスピーカーから響くと同時に、窓にぼつりぼつりと水滴が出来始めた。

空は、さらに濃い鉛色になっていた。

## 第4話 スケッチ

翌週の水曜日。

青空にはいくつもの雲が浮かび、それらは形を変えながら風に流されていく。

天気予報では、今日は晴れときどきくもり、気温は平均を下回るだろうとのこと。

確かに今日は過ごしやすい。

午後1時頃。

学校を午後から早退して、わたしはいつもの病院にいた。

そして、例の検査結果を待つ間、検査室の前で、ぼんやりと視線を宙に舞わせて考え事をしていた。

彼と初めて会った日から、今日でちょうど1週間。

あの日の出来事は、一体なんだったんだろうと思う。

いろいろと考えて・・・結局、何の結論も出ていない。

今日の青空だって、いつもどおりの灰色。

ただ、あの日見たオレンジ色だけが、色鮮やかな記憶として、わたしの心に残っている。

どうしてだろう？

その疑問が、いつまでも頭の中で回り続けていた。

『もう一度、彼に会いたい。』

わたしは、そう思い始めていた。

そして、そう思うことは、わたしにとって決して意外なことではなかった。

だって、もう一度会えれば、この疑問が解けるかもしれない。でも、同時に『もう会うことはないだろう』ということもわかっていた。

『秋月幸太と名乗る、リストカットの痕を持つ男性。』

わたしが、彼について知っていることはこれだけなのだから。

程なく検査結果が出た。

『・・・いっそのこと『異常あり』と言われた方がラクかもしれない  
と思っていた。』

しかし、無情にも、主治医の先生がいつもの笑顔で「異常なし。」  
をわたしに告げる。

わたしは、心の中で深い深いため息をついた。

診察室のある5Fから、エレベーターで1Fへ。

わたしの病気は難病指定されているため、窓口負担はゼロ。

今日も会計窓口から処方箋だけを受け取った。

そのまま、午後になって人の少なくなつた待合スペースを通り抜けて  
エントランスに向かう。

これから・・・どうしようかな。

そう考えた時、後ろから呼び止められたような気がした。

振り向いて周りを見渡す。

まっすぐこちらに近づいてくる人影を見て、わたしは声にならない  
声を上げた。

「っー」

少し色褪せたピンク色のポロシャツに、グレーのビンテージ系のジーンズ。

あの時と同じようにラフな格好をした彼『秋月幸太』が、銀色フレームのメガネの奥に涼しげな瞳をたたえて歩み寄ってくる。

彼は、目の前まで来て立ち止まり、右手を軽く上げて軽い挨拶をした。

「やつ。」

なぜ彼はここにいるんだろう？

その疑問だけが、わたしの頭の中を駆け巡り、それ以外の思考が出来ない状況に陥っていた。

この時、わたしがどんな表情をしていたのかはわからないが、きっとマヌケな顔をしていたことだろうと思う。

かろうじて、わたしは少しだけ右手を上げて挨拶を返していた。

「・・・アレ？」

そう言われても、わたしはまだパニック状態から脱出していない。

「もっと驚くかと思ってたんだけど。」

彼は、相変わらず笑顔で、わたしの顔を覗き込むように言った。そこで、わたしはようやく口を開くことが出来た。

「い、ごめんなさい・・・びっくりしちゃって・・・驚けなかった・・・。」

へんな発言をしてしまったのは、発言後にすぐ気づきはした。

しかし、後の祭りだった。

彼は、肩を震わせて「ククク」と鳩の鳴き声のような控えめな笑い方をする。

ここが病院でなかったら、お腹を抱えて大爆笑していたのではないだろうか。

わたしは、真っ赤な顔で、下を向いて立ちすくむ。

しかし、いつまでたっても彼の笑いは収まらなかった。

どうやら、ツボに入ったようだ。

「・・・そんなにおかしいですか？」

いい加減恥ずかしくなったわたしは、上目遣いで、少しだけふくれっ面で抗議してみる。

事態に気づいた彼は、ようやく笑つのをやめた。

「ああ、ゴメンゴメン。笑いすぎだったね。」

そう言っつて、彼は、左手でメガネを上げて、右手で涙を吹く。

わたしは、そのしぐさから、左手首には黒のリストバンドがあることに気づいた。

彼は、わたしの視線を感じてかどうか、さりげなく左手首を腰の後ろに隠すようにした。

「今、ちょっとだけ時間いいかな？」

これからどうしようかと思っつていたくらいだから、時間は別に問題なかった。

とりあえず、わたしたちは、待合スペースの一角に隣り合っつて腰掛ける。

その瞬間、何故かあの日と同じように、胸がドキドキしている自分

に気づいた。

さりげなく右手を胸に当てて、軽く深呼吸を試みる。  
少しだけ、落ち着いたような気がした。

「これ、ありがとう。」

彼は、白いハンカチを差し出しながら言った。

例のハンカチだった。

血はもう付いていない様だから、おそらく洗ったんだろう。

別に返してくれなくても良かったんだけど、せっかく洗ってきてくれたのだから、お礼を言って受け取る。

「そ、それでね。お、お願いがあるんだけど……。」

どういうワケか、言いくそうにお願いを切り出す彼。

今まで、年上然とした物言いばかりだった彼が、突然自信なさげになったのが少しだけ可笑しかった。

「え、絵のモデルになってほしい……んだ。」

……。

……。

……。

……。

はあ？

わたしは、本日2度目のパニックに陥った。

彼はというと、少しはにかみながら、人差し指で目元をぼりぼりしている。

しかも、いつの間にやら、小脇にスケッチブックを抱えているではないか。

そして何より、彼のメガネの奥の瞳が笑っていない。どうやら、本気のようなのだ。

「わ、わ、わたしなんか描いてどー……いや、あの……その前に……なんで突然絵なのか……と？」

ただひたすらパニクるわたし。

そんなわたしを、第三者視点で観察するもう一人のわたしが言う。

「だめだこりゃ」と。

いつの間にか、パニクるわたしを楽しむように眺めていた彼は、「まあ、あとは歩きながら話そう。」と言いながら、エントランスに向けて歩き始めた。

『ちよつと待て』と反論したいところだったが、今は口をあうあうさせるのが精一杯だったので、ついていくことしか出来なかった。

エントランスから病院の外に出ると、いつもより弱々しい太陽が照りつけ、サーっとそよ風が吹き抜けては、肌をひんやりとくすぐっていく。

今日に限っていえば、季節は夏ではなく秋という感じだった。

病院を出ると、目の前に薬局がある。

わたしが、いつも薬を受け取る『第一薬局』という薬局だ。

その薬局を見ながら、彼がわたしに言った。

「処方箋はもらった？」

「は、はい。」

「なら、先に薬を処方してもらいなよ。」

彼の提案ももつともだった。

後でここに戻ってくるより、先に済ませておいた方が良さだろう。

薬局に入ったわたしたちは、病院からもらった処方箋を薬剤師に提出する。

受け付けたのは、いつもわたしの薬を処方してくれる顔馴染みの薬剤師だったが、彼と一緒にわたしを見て少し怪訝な表情を見せた・

・ような気がした。

でも、そんな態度は、ほんの一瞬。

その薬剤師は、いつものように奥の調剤室に引っ込んで調剤を開始する。

わたしたちは、調剤が終わる間、待合室に腰掛けた。

「いやあ、唐突な話ですまないね。」

彼は、相変わらずの笑顔で、わたしに話しかける。

確かに唐突。

なんかこの人は、何をしでかすか予想できないな。

ヘンな人だ。

「あの・・・絵、なんて・・・どこで描く気ですか？」

わたしは、とりあえずの疑問を口にした。

何しろ、これからどこに連れて行かれるのか見当もつかない。

「ここから東に500mくらいかな。公園があるんだ。」

ああ、そういえばそんな公園があったような気がする。

先週の雑居ビルとは反対方向だ。

「そんなに時間はとらせないよ。多分30分くらい。お願いできないかな。」

まあ・・・30分くらいなら。

そう思ったところで、薬剤師に名前を呼ばれた。

わたしは、いつもの薬を受け取り、胸ポケットにしまいこむ。

わたしたちは、第一薬局を後にして、公園に向かって歩き出した。

「・・・絵・・・描けるんですか？」

彼が小脇に抱えているのは、明らかに使い込んでいない真新しいスケッチブック。

恐る恐るわたしは聞いた。

「まあ、大学時代に少々・・・ね。」

メガネを不自然にさわりながら、苦笑している。

やはり、普段から絵を描いているわけではなさそうだった。

「何故また急に？」

何故わたしを？ と聞きたいが、なんか聞きたくないような気がする。

彼は、鼻の頭を左の親指と人差し指で挟み込みながら、ちょっと考えてこつちを向かずに答えた。

「以前から描きたかったんだよ。モチーフを探していたんだ。」

そこまで会話が進んだところで、公園に到着した。

彼は、入り口から公園に入り、迷うことなく中心部を目指していく。遊具のある区域は、小さな子どもたちで結構一杯だった。

その周りには、そのお母さんたちが、お母さん同士でおしゃべりをしている。

芝の上に仲良く寝そべっている老夫婦といい、いかにも『今日は平日です』という感じの雰囲気だ。

公園の中心には、大きな樹があり、その木陰にはベンチが置いてあった。

休日なら、このベンチも空いていなかっただろうが、水曜日の昼下がりである今は空いている。

わたしは、そのベンチに座るよう促された。

彼はどうするのかと思ったら、少し離れた地面に直に座って、無言でスケッチブックとスケッチペンを取り出す。

それにしても、セミの鳴き声がうるさい。

ほとんどはツクツクハウシだけど、鳴き声の主の数が尋常じゃないような気がする。

きつと、この樹に無数のセミが住みついているのだろう。

そのセミたちの激しい自己主張のせいで、大声を出さないと彼とは会話が出来なそうだ。

描く準備の整った彼は、セミに負けない大声で言った。

「横を向いて！」

横・・・？

横顔を描くのだろうか。

言われるがまま、横を向いて座る。

彼は、しゃべることなく描き始めた。

わたしは、何も考えずに、視線の先に見える噴水を眺めることにした。

盛大なセミの声と、せわしなく動かされる彼のスケッチペン。

まるで、時間が止まったように、時間だけが過ぎて行った。

少々疲れを感じる頃、姿勢を変えたいと思ったところで彼が叫ぶ。

「今度は、そのまま上を見上げて！」

・・・30分まであとどれくらいだろうか。

そんなことを思いながら、少し凝った肩をグルグル回して、言われたとおり上を見上げる。

上を見上げると、木の枝葉が視界一杯に広がった。

そのあちこちから、太陽の光がこぼれている。

その木洩れ日に、わたしの記憶が反応する。

どこかで見えたことがある景色。

・・・そうだ。

小学校に入って間もない頃、『美加』と一緒に、家の近くの一本桜に登った時だ。

あの時は、高くまで登りすぎたわたしが、降りることが出来なくなつて大騒ぎになつたつけ。

何の悩み事もなく暮らしていた頃。

思い出されるのは、楽しかった思い出ばかり。

それらは、鮮やかな色を持った灰色じゃない思い出。

それを皮切りに、連鎖的にいろいろな思い出が脳裏に蘇る。

プールで、初めて25mを泳ぎきった時。  
運動会の徒競走で、初めて1位になった時。  
スキー場で、プルークボーゲンが上手だと先生に褒められた時。

どんな思い出にも、となりにには笑顔の『美加』がいた。

でも、そんな楽しい思い出のアルバムは、12歳の夏で終わりを告げる。

わたしの思い出はそこまで。

それ以降は、ただ灰色の記憶しか残っていない。

それは、きつと思いつとは言わないはずだ。

不意に思い出す『美加』の悲しそうな顔。

心臓がトクンと音を立てる。

自らが選んだ『孤独』という選択肢。

わたしは、その時から灰色の世界に閉じ込められたんだ。

そして、今も……。

すぐ近くに、人の気配を感じて我に返る。

盛大なセミの鳴き声が、急に聞こえ始めた。

「ありがとう。終わったよ。」

彼は、そう言いながら、スケッチブックを見せてくれた。

わたしの横顔ばかり4枚。

スケッチの右下には、4枚とも彼のサインが書かれている。

今日の日付とローマ字の名前・・・Kouta Akizuki

外見はともスマートな彼なのに、なんだかちょっとへたっぴなブロック体のローマ字。

なんだか、このサインと外見のイメージのギャップに、クスクスと

笑いそうになる。

でも、絵の方はよく描けてる。

わたしも、絵を描くのは得意な方だけど、わたしなんかよりずっと  
うまいと感じた。

「じ、上手ですね……。」

本音で言ったのだが、気の利いてない褒め方だったと思う。  
それでも、彼は嬉しそうに、恥ずかしそうに笑った。

## 第5話 拒絶

モデルになってくれたお礼にカキ氷でも・・・と彼が言った。

近くのファミレスでも良かっただろうけど、時間的にも場所的にも、会いたくない同じクラスの人間に会う可能性が高いように思えた。

そこで彼が案じた一計。

高校生がまず来ない場所。

ホテルの中の喫茶店。

そういえば、こんな雰囲気のカ喫茶店に来たのは2回目かな？

わたしは、小学校4年生の時に、父親がホテルの中の喫茶店に連れて行ってくれたことを思い出していた。

高い天井からぶら下がった豪華なシャンデリアや、透明感のあるピアニミュージック。

とてもシックで、落ち着いた雰囲気だった。

注文を取りにきたウェイトレスに、彼はアイスコーヒーを頼み、わたしはカキ氷いちごを頼んだ。

「かしこまりました。」と言って、離れていくウェイトレスを何気なく目で追う。

ファミレスの店員に比べると、どこか上品に感じるのは気のせいだろうか。

ふと彼を見ると、結構な汗をかいていた。

わたしは、ずっと座っていたし、木陰だったし、そよ風もあったので、汗はほとんどかいていない。

しかし、彼も木陰にいたはずなので、この汗の量にはちょっと違和感を覚えた。

単純に、汗かき体質なのかもしれないけど。

そして、彼はメガネを外して、お絞りで汗を拭き始めてしまった。  
・・・オヤジくさいぞ。

と思った瞬間、彼の目がわたしを見た。  
ビクツした。

まさか、わたしの考えていることがわかっている・・・とか？

「何歳に見える？」

突然、笑顔で質問をしてくる彼。

見た感じでは・・・にじゅう・・・じゅ？

いや、ここは少し若く言っておくに限る。

「にじゅう・・・よん？」

そんなわたしの答えを聞いて、彼は「くくく」と口に手を当てて笑う。

そんなにおかしかっただろうか？

「29歳だよ。」

「ええっ〜!」

わたしはしまったと思って口を押さえるが、近くの男性客からジロリと睨まれてしまった。

それにしても若く見える。

もうすぐ30歳には全く見えない。

「面白いね、キミは。」

彼は、笑いながら、あの涼しげな瞳でわたしを見る。そして、少しいたずらっぽく笑って言葉を続けた。

「次は、キミの学年を当ててみせようか？」

・・・えっ！

「城南高校の2年生・・・だろ？」

わたしは目をパチクリさせた。

「当たり前・・・です。」

でも、なぜわかったんだろう。

「実は、僕も城南高校の卒業生でね。」

「ええっ！」

また、さっきの男性客からジロリと睨まれてしまった。慌てて口を押さえるわたし。

「僕たちも黄色だったんだ。」

そう言って、指を折りながら説明をしてくれる彼。

29歳〓黄

28歳〓青

27歳〓緑

26歳〓黄

25歳Ⅱ青

・

・

・

17歳Ⅱ黄

おお、そっか。

校章を見れば、城南高校の生徒なのは一目瞭然。

あとは、彼の年齢から色の順番を追えば、わたしの胸ポケットに縫い付けられた校章の黄色が、今年の2年生を示しているのがわかるというわけだ。

そんな納得顔のわたしを見て、彼は言う。

「この間より、少しは元気になつたかな？」

元気になつたつもりはないけれど、改めてそんなことを言われると少々照れる。

いけない・・・頬が赤く染まってきたのが自分でもわかる。話題を変えなきゃ。

「あの・・・どうしてわたしの通つてる病院に？」

不思議に思っていた。

偶然かもしれないが、出来すぎな感じもする。

彼が口を開く前に、先ほど注文したものをウエイトレスが運んできた。

「お待たせしました。」と言いながら、彼の前にアイスコーヒーを、わたしの前にはカキ氷を置いて、「ごゆっくりどうぞ。」と言い残して彼女は去っていく。

彼が、どうぞと言うようなジェスチャーをしてくれたので、とりあ

えず「いただきます。」と小さく言ってから、一口食べてみた。久しぶりのカキ氷は、とてもおいしかった。

「・・・薬袋。」

彼は、わたしの薬袋を入れた胸ポケットを指差して、さっきの話の続きを始めた。

「その薬袋は珍しい色だね。普通は白だったり薄い青だったりするんだけど、あの病院の門前薬局・・・第一薬局のは濃い青なんだ。」  
確かに、今わたしの胸ポケットに入れている薬袋の色は、あの薬局の濃い青だった。

「先週キミと会った時に、その薬袋が胸ポケットに入っていたので印象に残っていた、というワケだ。」

「・・・すごい。」

さっきの学年当てといい、観察力があるなあと感じた。  
だから、絵がうまいのかもしれない。  
でも、なんでそんな薬袋なんかに詳しいんだろうか、この人は。

「まあ、そんなわけでキミにもう一度会えた。本当に良かった。」  
本当に嬉しそうな笑顔だった。

その眩しさに、わたしまで嬉しくなる。

・・・嬉しくなる？

唐突に、わたしの心臓がイヤな音を立てて軋んだ様な気がした。

いや、うすうす感じていたんだ。

病院で再会できた時も。

スケッチをしている時も。

そして、今も。

この人と一緒にいると『楽しい』って。

『楽しい』なんて気持ち、ずっと忘れていた。

でも、それは思い出してはいけなない気持ちのような気がした。

わたしの心臓が、ますますイヤな鼓動を奏でる。

もしも、今、わたしに向けられてる、この笑顔が消えてしまったら？

もしも、この楽しい一瞬が、消え失せてしまったら？

『もしも』という仮定が、わたしの思考を追い詰めていく。

『楽しい』という気持ちが強ければ強いほど、それを失った時の反動は大きい。

その辛さを・・・わたしは、痛いほど知っている。

また、悲しそうな『美加』の顔が脳裏に浮かんだ。

心臓が、悲鳴をあげているかのように強く早く鼓動し、わたしは右手で心臓を押さえつける。

いやだ。

イヤだ。

イヤダ。

もう、失うのはいやだ。  
でも、わたしの思考は、ある一つの結論しか導き出そうとしなかった。

きつとそうなる。

あの12歳の夏のように。

わたしの背中に、いやな汗が滲んでいくのがわかった。  
脇を、冷や汗のようなものが滴り落ちていく。

彼が、心配そうにわたしを覗き込みながら言う。

「大丈夫？」

今、わたしは、心配されるほどヘンな顔をしているんだろうか？  
それすらわからない。

「顔が真っ青だよ？」

そうかもしれない。

今のわたしが、すごく狼狽しているのはわかっている。

でも、思考がただ一点に集中してしまって、どうしようもない。

わたしは、慌てて立ち上がるうとして、足をテーブルに当ててしまった。

「ガタン！」という大きな音が、辺りに響く。

さっき、わたしを睨んだ男性客も、驚いてこっちを振り向いていた。

「だ、大丈夫？」

思いがけず、よろめいたわたしに、彼は心配そうに言葉をかけてくれた。

そんなわたしを支えようと、彼の右手が差し出される。しかし、わたしは、反射的にその手を振り払った。

「っ！」

わたしの拒絶に驚く彼。

でも、驚いたのはわたしもだった。

・・・なんてことをしてしまったんだろう。

わたしは、言い訳をするかのように、イヤイヤと首を横に振っていた。

胸の奥が苦しい。

驚いている彼に、首を振りながらわたしは言う。

「わたしは、みんなと違うから。」

声が震えていた。

わたしは、彼から離れるように、一歩後ずさる。

「みんなと同じようには、生きられないから。」

わたしがそう言った瞬間、なぜか彼は悲しそうな顔になった。その顔が、わたしの記憶の中の『美加』のそれとダブる。

いつも笑っていた『美加』と、笑わなくなってしまった『美加』。

眩しい笑顔の彼と、悲しそうな顔をする彼。

その不思議な一致が、12歳の夏の・・・あの時の記憶を蘇らせようとしている。

あの思い出したくない記憶を。

いやだ！

もうこれ以上、ここにいたくない！

今すぐに、この場を逃げ出したい！

わたしは、すでに溶けてしまったカキ氷をチラリと見る。

「カキ氷・・・ご馳走様でした・・・。」

一礼して、踵を返して走って逃げる。

周りの客が、わたしたちを見ていたような気がしたけど、そんな視線からも逃げたかった。

わたしは、店を出ても全力で走り続けた。

こんなに走ったのは久しぶりだ。

ほんの少ししか走っていないのに息が上がる。

脆弱なわたしの気管支は、呼吸するたび「ヒューヒュー」と音を立て、律儀にも限界に近いことをわたしに知らせてくれた。

ついにわたしは立ち止まり、どこぞの月極駐車場の前で地面にもかまわずへたりこむ。

どこだろう、ここは？

「はあっ・・・はあっ・・・。」

なかなか息が整わない弱いカラダ。

息を切らしながら、差し出された手を振り払ってしまった場面を思

い出す。

なんで、あんなことをしてしまったんだろう。でも、もう取り返しがつかない。

「これで、良かったんだ……。」

わたしは、自分に言い聞かせるように呟いた。

もう、12歳の夏のような辛い思いはたくさんなんだから。

ふと、頬に冷たさを感じ、触ってみる。

そう。これで良かったはずなんだ。

なのに……どうして、わたしは泣いているんだろう？

## 第6話 もう一度あの日のように

翌日。

いつもは目覚まし時計が必要ないほど規則正しく起きるわたしが、珍しく目覚めの悪い朝。

ベッドから起き上がると、なんだか身体がだるかった。

額に手を当ててみると、心なしか熱い。

いつもベッドの脇に置いてある体温計を取り出して、脇に挟みながら窓を開けてみた。

朝からどんよりした曇り空。

まるで、わたしの気持ちを表しているような天気だ。

窓の外に見える、川向こうの一本桜の木の葉が、生暖かい風に吹かれてザワザワ揺れる。

それと同時に、ピピツという検温完了の電子音が部屋に響いた。

37度6分。

大した熱じゃないし、ちょっとだるいだけなので、学校に行けなくてもない。

でも、今日の気分は最悪だったから、わたしは「体調が悪い。」とということにして学校を休むことにした。

午前10時過ぎ。

いつもなら、2時間目の授業中だ。

そんな時間に、わたしはパジャマのまま、ベッドに仰向けに寝そべって天井を見上げていた。

彼の手を振り払ってしまった場面が、頭から離れない。

『仕方がなかったんだ』と納得させようとする自分と、それを決して認めない自分がいた。

あの時、『楽しい』という気持ちを思い出してしまった。

それを失ってしまうことを考えたら、本当に怖かった。

だから、そうなる前に、彼の前から逃げた。

それなのに、この喪失感は一切なに？

そんな空虚な気持ちだが、わたしの気分を落ち込ませる。

一体、この気持ちをどうすればいい？

このままじゃ辛い思いをすることになる・・・それがイヤだと思っ  
たから逃げたのに。

逃げたら・・・もっと辛かった。

なんて理不尽な結末だろう。

笑えない。

救えない。

天井を見上げながら、右手の甲を額に当てて、誰もいない自分の部  
屋で、わざと声に出して呟く。

「馬鹿だ・・・わたし・・・」

優しく差し出された手を、払いのけてしまった。

湧き上がる強い後悔の念。

それが、『仕方がなかったんだ』という主張を、軽々と押しつぶし

ていく。

きっと、もうその手が差し出されることはないだろう。  
もう会うことすらないだろう。

胸の奥がキリキリ痛む。

病院の待合スペースで、笑い転げる彼の姿。

わたしの学年を当てて、少し得意げになった彼の顔。

わたしは、ムリヤリそれらを頭の外に振り払う。

だって、もうどうにもならないことだから。

そして、後に残るのは憂鬱な毎日・・・灰色の世界だけだ。

ならば・・・もう終わらせてもいいじゃないか。

今日、終わらせればいいじゃないか。

わたしは、自嘲するように笑ってしまった。

なんだ。彼と会う前に戻ってしまっただけじゃないか。

それなら、やるべきことは一つだと思った。

やり直そう。

もう一度あの日のように。

午後になるのを待って、わたしは制服に着替えた。

あの日と同じカッターシャツとブレザースカート。

別に学校に行くわけわけじゃないけど、ただ、あの日と同じ服装をしたかった。

これは儀式みたいなものだから。

わたしは、昼食もとらずに外に出た。

午前中は降っていなかった雨が、午後になってぼつりぼつりと降ってきていた。

この分なら、もう少ししたら本降りになるかもしれない。

熱も、まだ下がってはいなかったけど、今となっては、もう気にする必要もないだろう。

自宅から20分ほど歩き続け、あの雑居ビルにたどり着く。

10Fまでエレベーターで上がり、そこからは鉄鎖の向こうの階段で、屋上に上がる。

外に通じる鉄の扉を開けると、一粒の弱々しい雨粒が顔に当たった。わたしは俯いたまま、屋上の縁の金網に向かって一歩ずつ近づいていく。

あの日と同じように、ゆつくりと歩く。

まるで、ヴァージンロードを進むように。

でも、何故か足が震える。

一歩進むごとに、その震えが大きくなっていくことに気づいたけど、その理由がわからなかった。

不意に、わたしの頭の中に、何かが問いかける。

・・・本当にそれでいいの？

(何が?)

・・・このまま死んでしまっているの？

(別に・・・いいよ。)

・・・怖いんでしょう？

(怖くなんか・・・ない。)

・・・なら、どうして足が震えているの？

(わかんない。)

・・・それはきつと・・・

わたしは、頭の中の自問自答をムリヤリ打ち切るために、震える足を押さえつけるように、さらに一歩進む。

いいんだ。これは、わたしが決めたことなんだから。

これでいいはずなんだ。

・・・。

そう決めたはずなのに・・・胸の奥底から何かが込み上げて来る。

・・・怖い。

どうしてだろう。

あの日は、怖くなんかなかったのに。

でも、自分を誤魔化す事は、もう出来なかった。

やっぱり・・・死にたくない。

勝ち誇ったように、さっきの音が、また頭の中に響く。

・・・何が怖いのかわかる？

(死ぬこと・・・かな。)

・・・どうして、死にたくないんだらうね？

(それは、聞かれなくても・・・わかってる。)

そっだよ。

会いたいんだよ。

もう一度だけでいいから。

でも・・・もう会えないんだよ。

会う資格すらない。

だって、昨日、その手を振り払ってしまったんだから。

もう、わたしには他の道は残っていないんだ。

だから、行かないきゃ。

目の前の金網までたどり着けば、あとはそれを乗り越えるだけ。  
それで、全てが終わるから。

わたしは下唇を噛み締めて、再び歩き始める。

灰色の空も。

今、わたしが踏みしめているコンクリートも。

絶え間なく吹き付ける生暖かい風も。  
たまに顔に当たる、うっとうしい雨粒も。

わたしの命を、惜しんではくれない。  
それどころか、はるか下の地表から聞こえてくる車のクラクション  
は、まるでわたしを誘っているようだ。

・・・やっぱり、わたしは一人。

わたしは、みんなと違うから。  
みんなと同じようには、生きられないから。  
だから・・・しょうがないだよ。  
例え、煙のように、消えるように死んでしまっただとしても。

まるで、怖さがマヒしたように、足の震えは治まってしまった。  
もう、金網まで3歩ほど。  
そこで・・・その声は聞こえた。

「どこに行こうとしているんだい？」

全身に電流が走ったような気がして立ち止まる。  
その聞き覚えのある声は、昨日聞いたばかりなのに、ひどく懐かし  
く感じた。

今すぐにも、振り向きたかったけど、怖くて振り向けない。  
今さら、どんな顔をすればいいのかわからなかった。

彼の足音が、少しずつ近づいてくる。  
わたしの胸が、だんだん高鳴っていくのが、はっきりとわかった。

足音は、わたしのすぐ背後で止まる。

わたしは、肩をすばめたまま、未だに振り向けない。  
そんなわたしの背中に、彼は言った。

「助けに来たよ。」

「　　。」

ビクツとするわたし。

さらに心臓が早く激しく鳴った。

「昨日、キミの顔に・・・『助けて』って書いてあったからね。」

昨日のわたしの顔？

わたしは、心の中で軽く笑った。

そうか。昨日わたしは、そんな顔をしていたのか。

この人には・・・かなわないな。

何もかも、見透かされているような気がする。

あのメガネの奥の涼しげな瞳に。

途端に肩の力が抜ける。

この脱力感に、わたしは口元に笑みさえ浮かべていた。

「ここで待っていていれば・・・もう一度会えるような気がしていたんだ。」

そうだね。

ひよっとすると、わたしもそう思っていたのかもしれないね。

もう一度あの日のようにやり直そうなんて・・・この場所に来るための、自分をだますための方便だったのかもしれない。

また会えた・・・それだけで嬉しかった。  
そして、あれだけ感じていた怖さが、嘘のようになくなっていった。

わたしは、一体何を怖がっていたのか、その怖さを感じなくなっ  
てようやく気づいた。

12歳の夏のこと。

そして、今、わたしが抱える想い。

それら全てを胸に抱え込んだまま死んでしまえば、わたしは始めか  
ら存在していなかったかのように、後には何も残らないだろう。  
以前は、それでも良かったけど、今は違う。

想いを伝えたい人がいるから。

きっとわかってくれると信じることが出来るから。

だから・・・伝えたい。

それが出来ずに死んでしまうこと。

きっと、わたしは、それが怖かったんだ。

そうとわかったなら、もう迷いはない。

わたしは、振り向いて彼を見た。

わたしより20センチほど高い彼の身長。

自然に、わたしは彼を見上げるような形になる。

少しだけ茶髪に見える、さらさらの髪。

銀色フレームで、小さいレンズのメガネ。

そして、その奥の涼しげな優しい瞳。

その全てが、懐かしく感じる。

わたしは、彼に向かって微笑みながら言った。

少しだけ、昔話を聞いてくれますか？

わたしの12歳の夏のことを。

## 第7話 12歳の夏

始まりは12歳の夏。

この年の夏は、とびきり暑い夏だった。

待ちに待った、城南小学校のプール開きの日。

今年の夏用に新調した、紺色のスクール水着を着たわたしは、プールに飛び込みたくてウズウズしていた。

その右隣には、わたしと同じように目を輝かせて、いたずらっぽく笑っている女の子。

えんどうみか  
遠藤美加。

彼女は、小さな頃からずっと一緒だった。

家は川を挟んで向かい合い、お互いの部屋の窓を開ければ、会話すら出来た。

もつとも、そんなことをすれば、必ずどちらかの親から「ちゃんと家まで行って話をして来い。」と叱られたものだが。

幼稚園も一緒。

小学校も1学年1クラスしかなかったからずっと一緒。

たまにけんかすることもあったけど、すぐに仲直りできた。

親友。

まさに、わたしたちは、そんな言葉がピッタリだった。

いつも笑うことが好きだった。

ふざけては笑い、おどけては笑い、昨日見たテレビの話題で笑った。二人で笑いあっている時間が・・・本当に楽しかった。

そんな親友である彼女と、一緒にプールに入る瞬間を待ちわびてい

る。

先生が「急に冷たい水に飛び込んだら心臓麻痺を起こすぞ。」とか「薬液槽にはちゃんと胸までつかれ。」とか、いろいろと注意事項をしゃべっているけど、正直誰も聞いていなかった。

そして、ついに入っても良いという先生の合図。

男子は、次々にプールに飛び込んだ。

「こるあああ！ 言ってるそばから飛び込むなああ！」

とたんに先生の怒鳴り声があがるが、それは、みんなのテンションの高さに打ち消されてしまった。

そんな空気を読みつつ、わたしたちも一緒にプールに飛び込む。

ザッパーンという音とともに、わたしたちは約一年ぶりのプールの水に浸った。

やがて美加は「潜りながらにらめっこしよう。」といたずらな笑顔で言い出す。

望むところだ。

「それじゃ、せーのっ！」

わたしたちは、ゴボツと水中に潜って、お互い顔を見合わせ、精一杯の面白い顔をした。

二人とも、すぐにガマンできずに、水上に顔を出して・・・ひたすら笑った。

飛び散る水しぶきに、太陽の光が反射してキラキラ光る。

そんな色鮮やかな景色に、わたしは心を躍らせた。

本当に楽しかった日々。

中学生になっても、高校生になっても・・・こんな楽しい日々が続くと思っていた。

ある日、突然告知された病名は先天性循環器機能不全症候群。発症すれば、心臓や肺の細胞が硬質化し、ほぼ100%死に至る奇病。

そして・・・20歳まで生きる可能性は40%。

突然、突きつけられた40%の未来。

一緒に告知を受けた両親が、一番取り乱していたように思う。

母親は泣き続け、父親はただオロオロするだけだった。

わたしは、自分なりに逡巡し、あるシンプルな結論にたどり着いた。

40%なら、別に絶望するような数字じゃない。

今、生きているこの瞬間こそが一番大事なんだと思った。

わたしのこの病気のことは担任に伝えられ、この時から週1回の通院生活が始まった。

毎週水曜日に早退するようになったわたしを、みんなが訝しがるのは当然のことだと思うし、実際に美加も「なんで？」と聞いてくるでも、何故かわたしは、正直に答えることを躊躇った。

「ちよつとね。」と答えて、お茶を濁す。

何故、わたしは、正直に病気のことを告げることが出来なかったのだろう。

告げてしまったら何か壊れる・・・そんな予感を敏感に感じ取ってしまったのかもしれない。

例えそうだとしても、結局は美加を誤魔化してしまったことに小さな罪悪感が残った。

でも、わたしには、今までと同じように楽しく笑っていられる時間の方が大切だった。

7月。

もうすぐ夏休みということで、わたしは浮かれていた。  
そんなある晴れた日。  
いつもの6年生の教室。

わたしは、美加が別の女友達とおしゃべりしている姿を見つけた。  
いつもどおり仲間に入ろう・・・そう思って、わたしは美加たちに  
近づく。

美加は、そんなわたしに気づくと表情を凍らせた。

「あ・・・ごめん・・・わたしだけ・・・楽しくしちゃって・・・」

「

わたしには、『ごめん』の意味がわからなかった。  
でも、この日を境に、美加の笑顔は消えた。

先週、二人で笑いながら立てた夏休みの計画。

学校のプール開放日には、二人で行こう。

地区の夏祭りには、ありったけのお小遣いを持って、夜店に行こう。  
花火大会には、お気に入りの浴衣を着ていこう。

そんな最高の計画だったのに。

美加が笑わない。

だから、わたしも笑えない。

そして、美加の瞳には、同情の色が混じっていることを感じた。

そうか・・・知ってしまったんだね。

こうなるかもしれない。

そう思ったから、わたしは、美加に病気のことを話さなかったのに。  
でも、美加は、わたしを見捨てることはしなかった。

「プールに行こう。」と迎えに来てくれる。  
「花火大会に行こう。」と約束どおり浴衣で来てくれる。

そんな美加が、嬉しかったけど・・・辛かった。  
こんな辛い夏休みは、生まれて初めてだった。

2学期が始まった。

でも、不思議なことに、まるで灯火が消えたように活気のない教室。  
いつも笑い声のあった教室から、笑い声が消えたようだ。  
みんなが、美加と同じように笑わない。  
わたしは愕然とした。

これは・・・わたしのせい？

決してイジメなんかじゃない。  
だって、誰もがわたしに優しい。

「大丈夫？」

「どこか痛くない？」

「給食当番、代わってあげるよ」

そう・・・誰もが優しい。

いつ訪れるかわからない病魔に怯えていなくてはならないわたしの  
前で、そんな病魔の心配のいらぬ自分たちが無神経に楽しんで  
てはいけない。

そういうことらしかった。

誰の発案かはわからない。

担任の先生が言ったのかもしれないし、自発的に誰かが始めたのか  
もしれない。

でも、そんな『優しさ』は、わたしの心を容赦なく削り取っていく。

同情の瞳とともに声をかけてくる美加。

わたしの辛さを共有するように、辛そうな表情で。  
そして、決して笑わない。

やめてよ、美加。

そんなに気を使わないでよ。

わたしは、今までどおりふざけあったり、大笑いしていたいよ。

そんなわたしの気持ちは、もう美加には届かない。

だって、それは一番最初に伝えるべきことだったから。

病気のことを、わたしの口から、ちゃんと美加に伝えるべきだったのになかった。

誤魔化してしまった。

生まれた小さな罪悪感、わたしの口を嚙ませてしまう。

動いてしまった歯車には、もう抗えなかった。

いつも、わたしに気を使う美加。

わたしと一緒にいても、ちっとも楽しそうじゃない美加。

今までと同じように笑って欲しいのに・・・いたたまれない気持ちが胸に響く。

わたしは、笑わなくなった美加の顔を見るのが、苦痛に思うようになった。

そして、美加が笑えなくなったのは、わたしのせいだと思つと、本当に気分が沈んだ。

そうだ。

わたしのせいだ。

わたしが、こんな病気になっちゃったから。

だから、わたしは、みんなに・・・美加に迷惑をかけたくないんだ。そのため、わたしが出来ることはなんだろうか。わたしには、たった一つしか思い浮かばなかった。

みんな、わたしを気にしなければいい。

そうして、わたしは『孤独』という選択肢を選んだ。選ばざるを得なかった。

それは、とても悲しい結論だったけど、唯一の結論だった。

話しかけられても答えない。目を合わせない。

まるで、わたしは異世界の人間であるかのように。自分の存在を、常に虚ろにするよう心がける。

もちろん、美加に対しても同じように。

わたしが、親友じゃなくなるまで。

そして、友だちですらなくなるまで。

でも、わたしの心は『それ』に耐えられるだろうか。そう思ったから、わたしは心に壁を作った。

わたしは、みんなと違うから。

みんなと同じようには、生きられないから。

だから、わたしはみんなに無視されても、平気なんだ。だって、それは仕方のないことなんだから。

『仕方がない』と思うことで、全てをあきらめることが出来るから。

突然のわたしの変貌に、最初はみんな戸惑っていた。でも、それが続くと、やがて感情は変わる。

「何、あの態度？　せつかく心配してあげてるのに！」

そんな声を何度か聞いた。

別に心配なんてしてくれなくていいのに・・・そう思った。

そうして、クラスメイトたちは、わたしに話しかけることすらなくなつた。

でも、美加は違つた。

怒り出すことはなく、いつも悲しい顔をするだけ。

もはや、わたしに話しかけてくるのは美加しかいなくなっていた。

9月も中旬に差し掛かり、みんなの夏休み気分が抜けた頃。

夏の終わり・・・そんな小雨ぱらつくある日。

赤いランドセルを背負つて、一人下校するわたしを、美加が後ろから追いかけてくる。

そして、同じく赤いランドセルを背負つた美加は、わたしに追いつくと、「濡れちゃうよ。」と言いながら、わたしの頭が濡れないように、赤い傘を差してくれた。

それは、美加の優しさだと思つた。

でも、そんなのわたしの知ってる美加じゃない。

きつと、以前の美加なら、「入れてあげよつか？　じゃあ、耳をピクピクって動かしてみるのだ！」とか言つて、一生懸命耳を動かそうとするわたしを見ながら大笑いしていたはずだよ。

だから、わたしは、傘には入らずに速歩きで逃げた。

「ねえ、くるみ！　どうしてしゃべってくれないの!？」

怒ったような美加の声に、わたしは思わず立ち止まる。

美加は、再び追いついて、わたしと向き合った。

そして、沈黙。

小雨が、わたしと傘を持ったままの美加を、遠慮がちに濡らしている。

・・・辛いからだよ。

わたしに気を使う美加を見るのも、わたしのせいで笑わない美加を見るのも・・・辛いんだよ。

だから、もうわたしに構わないでほしい。

苦しいのも・・・辛いのも・・・

「もう・・・イヤだから。」

そんな一言に、凍りついたように、一際悲しそうな顔をする美加。わたしは、その表情から逃げるように、その場を走り去る。遠ざかる美加の姿。

逃げるわたしに、追い討ちのような美加の一声が浴びせられる。

「くるみのバカア~~~~!!」

泣きながら絶叫したような声。

美加のそんな声、初めて聞いたよ。

降り続く雨の中、わたしは、今何かが終わったことを悟った。

その翌日から、美加は話しかけてこなくなった。

やがて、美加にもみんなにも笑顔が戻った。

笑顔と笑い声の溢れる教室。

一学期の終わりまでのこの教室は、確かにこんな雰囲気だった。

良かった・・・これで元に戻ったわけだから。  
・・・わたし以外は。

もう、その輪の中にわたしはいない。  
もう、誰の目にも、わたしの姿は映っていない。

仕方がないんだ。  
だって・・・

わたしは、みんなと違うから。  
みんなと同じようには、生きられないから。

『わたしは、ただ今までと同じように笑っていたかった。  
そんな思いは、胸の奥底の届かないところにしまいこまれ、とうとうわたしの心はからっぽになった。』

毎日は、空虚で消費するだけの日々に変わり、とある朝に、トボトボ歩く通学路で、何気なく空を見上げて気づいた。

なんで、空が灰色に見えるのかなあ。

ああ、そうか。  
いくら空が青くても・・・いくら雲が白くても・・・もうわたしには関係ないことだもんね。  
今は、みんなとは違う別の世界にいるようなものだから。

一日として同じ日なんてないはずなのに、わたしにとって毎日が全て同じように感じる。  
ただ、ひたすら無感動に、毎日は過ぎ去っていくだけだった。  
この、目に映るもの全てが灰色の世界で。

## 第8話 わたしの居場所

ちよっぴり長い昔話は終わり、いつの間にやら本降りになった雨は、わたしたちを容赦なく濡らしていた。

目の前の彼の髪の毛も、白いポロシャツも、青いジーンズもずぶ濡れだった。

おそらく、わたしも似たようなものだろう。

カッターシャツもブレザースカートも、肌をピトピトと張り付いて気持ちが悪い。

額に張り付いた前髪からは、水滴が滴り落ちていった。

誰にも話したことのない12歳の夏の出来事。

当然だ。

わたしは、話すべき相手さえいない灰色の世界に佇んでいるのだから。

そんな灰色の世界に5年間。

心の殻に閉じこもって、ただひたすら他人を拒絶する。

そんな悲しい孤独が、わたしの心に灰色のフィルターをかけてしまった。

美加の・・・あの悲しそうな顔は、忘れられない記憶。

「くるみのバカア〜！」という叫び声は、まるで鼓膜にこびりついているようだ。

もし、こんな病気にさえならなければ・・・。

そう考えたこともあったけど、そんな仮定は無意味だ。

そんなことは、5年前に気づいていた。

わたしは、彼の顔を直視して言った。

「例え、わたしの未来が『40%の未来』でも、関係ないと思いたかった。」

「……。」

「わたしは……ただ普通に生きていたかった。」

「……。」

「でも、出来なかった。」

12歳の夏のことを思い出すと、いつでも涙がこみ上げてくる。

でも今は、雨粒がわたしの顔を濡らしてくれていたから、きつと泣いているかどうかなんてわからないはずだ。

だけど、声が涙で震えていることまでは隠せなかった。

「それでも……やっぱり生きていたいよ。」

ずっと心の奥にしまいこんでいた本音。

自分すら、その存在を忘れかけていた。

「普通に……みんなと同じように……。」

一度、口に出した想いは、止まらなかった。

その想いは、12歳の夏に、一度飲み込んだ想い。

笑っていたかった。

孤独になんてなりたくなかった。

5年前に、届かない場所にしまいこまれた想いは、ずっとくすぶり続けていたんだと、今はつきり気づいた。

彼のメガネが水滴に濡れて、瞳は見えなかった。

でも、いつものように涼しげな瞳で笑みを浮かべているに違いない。  
・何故かそう思えた。

「生きてて……いいんだよ。」

それは、とても優しい声だった。

そして、静かに……自信に満ちていた。

どうして……そんなに自信ありげなんだろう？

でも、確かに『その言葉を信じていいんだ』と、そんな気にさせられる。

それなのに、一抹の不安が消えない。

生きてていい。

そんな魔法のような言葉に、本当にすがっていいんだろうか？

すがった瞬間に、それは砂上の楼閣のように消え去ったりしないだろうか？

否。

きつと……大丈夫。

今なら、その言葉を信じる事が出来るよ。

だって、彼は『わたしを助けに来た』って言ってくれたじゃないか。

わたしの目から、涙が溢れた。

それが、雨の雫と交じり合って、頬を濡らしていく。

わたしは、『みんなと同じようには、生きられないから』という想いに、ずっと縛られ続けてきた。

その想いは、『みんなと同じように生きていたい』という想いをも飲み込んで、わたしを苦しめてきた。

みんなと同じように生きてはいけないのだと・・・それはいけないことだと思っていた。

でも・・・違ってたんだ。

こんな簡単なことに、気づきもしなかった。

それは・・・わたしの心にかけられた呪縛にしか過ぎなかったんだと。

心に、少しだけ晴れ間が差したような気がして、上を向いた。

だけど、相変わらず降り続く雨が、わたしの顔を叩く。

今の上気した顔には心地いい。

そう思った瞬間、心臓が止まりそうになった。

彼は、わたしを包み込むように抱き締めていた。

生まれて初めての経験に、心臓がこれ以上ないほど大きく早く脈打つ。

「辛かったね。」

今度は、労わるような声。

自分で選んだ『孤独』という選択肢。

美加のためだと、美加の優しさを踏みにじるように無視しなければならなかった辛さ。

美加の悲しそうな顔を見せ付けられた時の辛さ。

「くるみのバカア〜！」という叫び声が聞こえた時の辛さ。

そして、『わたしは、みんなと違うから。』という心の殻に閉じ込められた、5年間の孤独の辛さ。

孤独であるが故に、その辛さなど誰にも気づいてもらえなかった。だからこそ、彼がそれを理解してくれたことが、今は何よりも嬉しい。

同時に、溜め込んだ5年間分の辛さが、涙に形を変えて次々と溢れてくる。

もう、我慢することなんて出来ない。

わたしは、彼に抱きつきながら、思い切り泣きじゃくった。

・・・まるで、子どものように。

雨は、止むことなく降り続けていたけど、もう気にはならなかった。ようやく止まった涙。

気づくと、彼はわたしを抱き締め、わたしは両腕を彼の背中に回して抱き締めていた。

彼の身体に密着したわたしの胸。

激しい心臓のドキドキが、彼に聞こえてしまっているんじゃないだろうかと思うと、気恥ずかしさを感じる。

そんなわたしの気持ちを察してかどうかはわからないけど、彼は小さく囁いた。

「もう少し・・・こうしていてくれないか。」

そう言いながら、彼の右手はわたしの頭を抱きかかえる。  
心の底から嬉しかった。

だから、わたしは、さらに両腕に力を込めて、彼を強く抱き締めた。

ここが、わたしの居場所。

そう確信した。

でも、わたしは、もう一度・・・確かめるように小さな声で囁く。

「わたし、もう一人じゃ・・・ないよね？」

こうして抱き締めてくれていることが、もう一人じゃないという何よりの証拠なのに、嬉しい答えが返ってくるのを期待して、あえて確かめてみる。

「・・・そうだね。」

期待通りの返事。

心を撫でてくれるような優しい声。

思わず顔が綻んでしまうほど嬉しい。

彼の背中に手を回してみても、初めて気づいた。

あんなに細身に見えた身体なのに、やたらと背中が広く感じる。

やっぱり男の人って、身体が大きいんだな。

そして、そんな彼に包み込んでもらっている安心感が、わたしを蕩けさせる。

心の底から感じる安らぎ。

わたしは『いつまでもこうしていたい。』と願った。

でも、それは叶わなかった。

「げほっ！」

突然訪れた体の変調。

「げほっげほっ！！」

今まで経験したことのないような咳が、わたしの呼吸を困難にさせる。

胸の奥底から出てきたような咳が止まらない。

わたしの急な変調に驚いたせいかわたしを抱きしめていた彼の腕の力が弱まり、支えを失ったわたしの体は地面に突っ伏した。

それでもなお、咳は止まらなかった。

彼が、何か話しかけているような気がするが、雨音と自分の咳で、何を言っているのかわからない。

激しく咳き込みながら、わたしはある事態を想像していた。

（発症！？）

病名は先天性循環器機能不全症候群。

発症すれば致死率は100%。

呼吸の出来ない苦しさに、意識が朦朧としてくる。

イヤだ！

生きてていいって言ってくれた。  
もう一人じゃないって言ってくれた。  
だから、わたしは生きるんだ・・・生きたいんだ。

それなのに、苦しくなるばかりの呼吸。

咳の合間に呼吸を試みる。

喉がヒューヒューいうばかりで、十分な空気を取り入れることができない。

視界が暗くなっていくような気がして、怖さのあまり、わたしは咳き込みながら叫んだ。

「助けて！」

彼は、背中をさすってくれているようだった。

苦しさの中で、彼がそばにいてくれることだけが救い。

わたしは、必死で彼の腕にしがみつく。

でも、だんだんと薄れていく感覚。

わたしの体を叩いているはずの雨も、わたしの背中をさすってくれているはずの彼の手も、もう感じられなくなってしまった。

視界が、限りなく暗闇に近づいていく。

こんなのってないよ。

ようやく、灰色の世界から抜け出せると思ったのに。

イヤだよ。

死にたくないよ。

そこまで考えて・・・わたしの意識は闇に消えた。

## 第9話 飛べない鳥

わたしは飛べない鳥。

例え両翼が無事でも、心の翼が折れていては飛べはしない。  
だから、わたしは飛べない鳥。

わたしは群れから袂を分かち、ただ一人、灰色の大地に佇む。  
みんなは、力強く未来へ向かって飛んでいった。

それを見ることしか出来ないわたしを、誰も気に留めることなく。  
わたしは、みんなと同じようには飛べない・・・だから、仕方がないんだ。

でも。

わたしも、同じように飛んでいきたい。

その気持ちだけは、誰にも消せはしない。

わたしの、心の奥底に眠る大切な火種なのだから。

ある日、突然現れた、メガネの魔法使いさん。

その魔法使いさんは、「キミは飛んでもいいんだよ。」と言って、  
とっておきの魔法をかけてくれた。

心の翼を直す・・・とびつきりの魔法を。

・・・なんだか、心が強くなったような気がした。  
ひよつとして・・・本当に飛べるかもしれない。  
ちよっぴり怖いけど、飛んでみよう！

わたしは、目一杯の助走をつけながら、5年間使うことのなかった翼を大きく広げ、大地を勢いよく蹴る。

飛べた！

とても久しぶりだから、うまくは飛べない。

高くも飛べない。

それでも・・・今わたしは飛んでいる。

なんて気持ちいいんだろう。

こんな気持ちは、ずっと忘れていたよ。

広げた翼に風を受けながら、頼りなくも飛び続けるわたしを、あの魔法使いさんは見てくれているだろうか？

そっと振り返ったけど、姿はもう見えなくなっていた。どこに行ってしまったんだろう？

先に行っただはずの群れは、はるか遠くの、はるか上空を飛んでいた。

もう一度あんな風に飛べるかな？

・・・さあ？

それは、やってみなきゃわからない。

もっと高く。

もっと遠くへ。

やってみるよ。

この翼が動く限り。

あの忌々しかつた灰色の大地は、はるか遠くに見えなくなった。  
心地良い浮遊感は、わたしの五感を絶え間なく刺激する。

そして、わたしは、この大空に溶け込むような感覚に酔いしれた。

やがて、眼下の景色は、見渡す限りの大海原に変わり、さわやかな  
潮の香りが鼻をくすぐる。

青い空のど真ん中で、強烈な自己主張をする太陽の光が、燦々と照  
りつける。

水面に反射する光がキラキラして・・・とてもキレイ。

まるで、わたしを祝福してくれているようだ。

この飛んだ先には、何かあるのだろうか？

いや、何があつたってかまうもんか。

だって、今は飛べるだけで嬉しいから。

力いっぱい広げた翼に受ける風が、最高に気持ちいいから。

さあ、行こう。

わたしは、もう飛べない鳥じゃないのだから。

## 第10話 美佳

夢を見ていた。

すごく楽しい夢だったような気がするけど、どんな夢だったのか忘れてしまった。

不思議なことに、とても頭が軽く、すっきりした気分だった。

目を開いたわたしの視界には、白い天井が映っていた。

とりあえず起き上がろうとしたけど、頭は軽いのに体が妙に重いとに気づく。

起き上がれない。

かろうじて動く頭を、左右に動かして周囲を確認すると、自分の腕に点滴の管が繋がっていることに気づいた。

どうやら、ここは病院のようだった。

生きてる！

ひどく咳き込んで、最後に意識を失う瞬間、これで死んでしまうんだと思った。

その後のことは、もちろん覚えていない。

その時、ノックとともに少々年配の看護婦さんが入室してきた。

「あら、目を覚ましたのね。良かったあ。気分はどう？」

その看護婦さんは、笑顔で尋ねてきた。

でも、体が動かないので、わたしはとりあえず頷くだけ。

悪くはない。

それで意味は通じたようだ。

「今、先生を呼んでくるから。ちょっと待っててね。」

そう言つて、パタパタと退室していく看護婦さんを目で追う。これは夢じゃない・・・そう思った。

すぐに先生が入室してきた。

その先生は、いつもの主治医だった。

どうやらこの病院は、いつもわたしが通院している病院のようだ。その主治医は、病状を詳しく説明してくれた。

どうやら、発症したわけではなかったらしい。

気管支の炎症を引き金にした一時的な喘息の発作。

それによつて呼吸困難に陥り、わたしはこの病院に担ぎ込まれた。喘息の処置を施したところで、肺炎を併発することが判明し、高熱にうなされながら、一時は命も危うい状況だったということだが、結果的に最初の一晚を越したところで病状は小康状態になり、以後丸3日眠り続けて、今起きた・・・というワケだった。

わたしは、『発症ではなかった。』という事実本当に安堵した。生きていたい。死にたくない。

こんなに強く願つたことはなかったと思う。

そういえば・・・秋月さんと抱き締め合つた時の事を不意に思い出して、顔が真っ赤になった。

耳まで真っ赤になっている自信があるが、自然に顔が綻ぶ。

『生きてて・・・いいんだよ。』

その言葉が、今のわたしを支えている全てのよような気さえした。

程なくして母親が病室に現れ、わたしの意識が戻つたことをすごく

喜んでくれた。

とりあえず、わたしは、あと1週間ほどの入院が必要らしい。まだ、完全に肺炎が治癒していないので、当分は定期的な抗生物質の投与が必要だし、体力も相当落ちているので点滴も必要だからと母親は言う。

確かに、まだ起き上がれもしない。

熱もあるし、体もだるい。

最後に、母親は「とりあえず今は寝てなさい。」と言った。そうしよう。

わたしが目を瞑ろうとした時、母親は思い出したように言った。

「そういえば、あなたを病院までおんぶしてきてくれたっていう男の人……。」

うっ。

おんぶされてきたのかわたし……。

それは……かなり恥ずかしいな。

顔が火照っている……おそらく熱のせいじゃないだろう。

「一晩付き添ってくれて、峠を越えたという医者話を聞いてから帰っていったわよ。」

母親は、その男の人とわたしがどういう関係かは何も聞かなかった。おそらく察してくれているのだろう。

まあ、聞かれても答えようがないけど。

そうか……ずっといてくれたのか。

どんな様子で一晩付き添ってくれたのか、なんとなく想像がついてしまうのが嬉しく感じる。

ホッとしたわたしは、そのまますぐに寝入ってしまった。

翌日も、その翌日も、ほとんどベッドで寝て過ごさざるを得なかった。

ベッドに起き上がれるくらいにはなったが、しんどくて、いつもどおり動き回れる状態にはほど遠かったからだ。

だが、3日目にもなると大分体も軽くなり、ベッドから降りることも出来るようになっていた。

ふらつくので、歩くのはまだムリだが、主治医から車椅子での移動の許可が出たので、早速いつもの年配の看護婦さん・・・斉藤さんが散歩に連れ出してくれることになった。

9月中旬。

季節は、もう秋と言っても差し支えないほどだった。

あれだけうるさかったツクツクホウシの鳴き声も聞こえなくなり、夏に比べて空が高くなった気がする。

そんな夏の終わりを感じさせるようになった病院の外庭を、わたしは、車椅子に乗ったまま、ゆっくりと散歩していた。

のんびりした散歩のはずなのに、見舞い客らしき人影を見つけては凝視してしまう。

背格好が、秋月さんにそっくりな人を見かけるたびに、胸がドキんとする。

でも、人違いとわかって「チエツ」と思う。

・・・まあいいか。

きつと、そのうち来てくれるだろう。

そんな中、憂鬱そうにしゃがみこんで、池の中で泳ぐ錦鯉を眺める12歳くらいの少女が目止まった。

その少女は、わたしと同じ入院患者専用のパジャマを着て、肩までかかるくらいの髪を、緑色のヘアバンドで束ねているのが印象的だった。

「ちよつとごめんなさいね。」

そう言つて、わたしの車椅子を押してくれていた斉藤さんは、車椅子を離れ、その少女に近づいていく。

「美佳ちゃん。明日は手術だから、あまり外に出たりしないようにつて先生に言われなかった？」

斉藤さんは、すごくやさしく話しかけたけど、その少女は池を見つめたまま返事をしなかった。

わたしは、その会話を聞きながら、ある少女の顔を思い出していた。12歳の夏までの親友・・・遠藤美加。偶然にも、名前が同じ『ミカ』だ。

斉藤さんは、その『美佳』に、なおやさしく話しかけている。

「手術のために体力を温存しておかなくちゃいけないのよ。お部屋に戻りましょう?。」

それでも少女は返事をしない。

説得しているうちに、別の看護婦がやってきて、少女に一言一言言葉をかけてから手を引いていく。

どうやら強制送還となったようだった。

やれやれという感じで、車椅子に戻ってきた斉藤さん。

「ごめんなさいね。放り出しちゃって。」

少し肩をすくませて、おどけた笑顔で謝る斉藤さんに、わたしは少しだけ笑顔を返した。  
また、ゆっくりと動き始める車椅子。

「さっきの子ね・・・明日難しい手術なの。」

どうやら、この看護婦さんは話好きらしい。

看護婦さんは、車椅子を押しながら、さっきの『美佳』という少女の話 시작했다。

「きつとナーバスになっているのね。ここ何日か、ずっとあんなふうに一人で考え事しているのよ。」

難しい手術か。

きつと怖いだろうな。

手術の後、もう意識が戻ることなく死んでしまう可能性だってあるのだから。

それに似た経験をした直後だけに、その気持ちが痛いほどよくわかった。

そんな話を聞いたせいだろうか。

わたしは、彼女のあの憂鬱そうな顔とあの頑なな態度が、気になつてしょうがなかった。

部屋に戻ったわたしは、すぐベッドに寝かされた。

斉藤さんは、車椅子を部屋の隅っこに片付けながら言う。

「まだ、しんどいだろうから、ちゃんと休んでね。それと、外に出

たい時は、私に言って頂戴。また車椅子を押してあげるから。」

そして、斉藤さんは、忙しそうにパタパタと部屋を出て行った。

看護婦という職業だからかもしれないけど、『優しい人だな』と思う。

他の看護婦さんたちからの人望もありそうだし、わたしの担当がこ  
の人で本当によかった。

・・・主治医の先生がちょっと苦手だから、特に。

そんな他愛のないことを思いながら、わたしは、あっという間にま  
どろみ始める。

やっぱり、まだしんどいみたい・・・。

夕方になって、はっと目が覚める。

寝る前に感じていたしんどさが、少し解消された感じだった。

わたしは、ベッドの上で上半身を起こして、両腕を上げて伸びをす  
る。

ちゃんと目が覚めたのを確認して、「フー」と息を吐いた。

目が覚めたといつても、特にすることもない。

何気なく窓の外を見ると、昼間と同じように池の前でしゃがみこん  
でいる、あの少女の姿が目に入った。

それは、本当に偶然だった。

そのまま、その姿を観察する。

後姿しか見えなかったから、表情は見えない。

でも、その背中からは、昼間と同じような憂鬱なオーラを感じた。

・・・確か、明日の手術のために、外には出ないようにって言われてなかったっけ？

何故かはわからないけど、なんだか、ほうっとおいてはいけないよ  
うな気がした。

わたしは、急いで車椅子に乗り、そこに向かった。

昼間と違い、夕方外の空気は、少し冷えてきていた。

わたしは、『美佳』を見つけると、車椅子のまま近づいて、思い切  
って声をかけてみる。

「こんにちは。」

『美佳』は「えっ！」という顔でわたしのほうを振り返る。  
あいさつは返ってこなかった。

明らかに「なんだこの人。」みたいな感情を感じる。

「明日・・・手術なんですよ？」

『美佳』の肩がピクンと反応する。

「こんなところにいたら、カゼ・・・ひいちゃうよ。」

返事をしかねている・・・そんな感じだった。

昼間と同じように、話しかけたのが看護婦さんなら無視しただろう。  
でも、わたしは同じパジャマを着た、車椅子に乗った入院患者だ。

「お姉ちゃんは・・・いいの？」

い・・・痛いところをつかれた。

確かに、わたしも斉藤さんに断らずに部屋を出てきてしまった。

「あ・・・わたしも肺炎がまだ直りかけだから・・・ダメかも。」

わたしが正直に答えると、『美佳』はくすくす笑った。  
さっきまでの仏頂面より、よほど魅力的な表情だった。

「お姉ちゃん・・・面白いね。」

わたしは、ちょっと恥ずかしくなって、顔を赤らめる。  
そういえば・・・秋月さんにも同じようなこと言われたな。

「でも・・・いいよね。もう直りかけなんだから。」

それは確かに・・・でも、現状はそうだけど経緯を無視されては困る。

「う・・・ん、でも最初は死んじゃうかもって思ったんだよ。」

「でも、もうすぐ直るんでしょ？」

・・・肺炎はね。

でも、わたしの『40%の未来』に変わりはない。

もちろん、それはあえて言わずに、わたしは話題を変えた。

「美佳・・・ちゃんだったよね？」

「なんで知ってるの？」

「看護婦さんが教えてくれたから。」

「ふーん。」

美佳は、少しぶっきらぼうな感じで答える。

あまり看護婦にいい感情を持っていないようだ。

「手術は・・・怖い？」

わたしの質問に、美佳の表情が曇る。

「・・・だって、成功率が40%しかないんだもん。」

「よ、40%・・・!？」

この奇妙な偶然に、わたしは目を丸くする。

「アタシの病気・・・ファロー四徴症っていうの。」

「・・・どんな病気なの？」

「心臓の形がおかしいから、明日の手術で正しい形にするんだって・・・そう先生が言った。」

「・・・。」

「手術が失敗したら・・・もうママともパパとも友だちとも会えなくなっちゃう。だからすごく怖い。」

池の水面を眺める美佳の目の前で、鯉が跳ねて「パシャンッ!」と

いう水音を立てる。

「・・・確かに怖いだろっな。そんな大手術の成功率が40%だなんて。」

わたしが、この少女にしてあげられることはあるだろうか。

明日、成功率40%の手術に立ち向かうこの子に、わたしは何かをしてあげたかった。

「わたしも・・・40%なんだよ。」

「？」

「20歳まで生きられる確率。」

「ええっ！　なんで!?!」

美佳は、目を丸くして驚く。

「先天性循環器機能不全症候群って言う病気だね、発症すると死んじゃう病気。20歳まで生きる確率が40%って言われているの。」

「・・・。」

口をポカンと開けて、美佳はわたしの顔をまじまじと見ている。あんまり見られても・・・恥ずかしいな。

「でも、わたしだって死にたくないから。」

「・・・。」

「だから・・・わたしは40%の可能性の方を信じるようにしてるの。」

「・・・40%の可能性の方を信じる・・・？」

「そう。絶対に40%の可能性の方を実現してやるんだって信じるの。」

そう言いながら、わたしは両手でガッツポーズを作る。

「そうじゃないと、いつか残りの60%に・・・病気に負けちゃう気がするから。」

わたしは、途中から自分に言い聞かせるようにしゃべっていた。そんなわたしを、美佳はクスクス笑いながら見ている。

どうやら、わたしのガッツポーズが面白おかしく見えたらしい・・・何故？

わたしは、照れ隠しのように語気を強めた。

「だからね、美佳ちゃん！」

「は、はいっ！」

美佳は、わたしの声に驚いたのか、背筋を伸ばして答える。なんだか、その仕草が妙に可愛くて、クスっとしてしまった。

「美佳ちゃんも、明日の手術が絶対に成功するって信じて。」

そして、わたしは右手の小指を差し出す。

「約束しよう?」

美佳はあっけに取られた様に・・・でも確かに右手の小指を差し出し、わたしたちは指切りゲンマンをした。

「約束だよ?」

わたしは、美佳の顔を覗き込むようにして、重ねて聞く。

美佳は、少し吹っ切れたように「うん。」と答えてくれた。

「わたしも、明日の手術が絶対に成功するって信じるから。」

美佳は、さらに元気に「うんっ!」と答える。

「お姉ちゃん。まるで魔法使いみたいだね。」

「え?」

「アタシ、すごく元気が出てきたよ。」

美佳は、さっきわたしがしたようなガッツポーズをして言う。  
それが、とても微笑ましくて、嬉しかった。

「じゃあ、明日は頑張ろうね。」

わたしもまた、ガッツポーズで励ます。

気がつくともう日が暮れようとしていた。

美佳と一緒に病室に帰る途中、わたしは『どうして、わたしは彼女に話しかけたんだろう？』

』と考えていた。

それはきつと、彼女の中にわたしを見つけたから。

得体の知れない暗闇の中で、一人怯えているような姿が、わたしと同じだったから。

そして、名前が「ミカ」だったから・・・っていうのもあったのかもしれない。

美佳の病室の前で、バイバイをして別れる。

その笑顔を見て、わたしは、彼女に話しかけて良かったと思う。

例え、その励ましが気休めにしか過ぎないとしても、わたしが彼女にしてあげられることは、多分これくらいしかないから。

あとは、心の底から手術の成功を祈るだけ。

まるで、彼女の未来に自分の未来を重ね合わせるかのよう。

## 第11話 約束

病室に戻ったわたしは、斉藤さんにこっぴどく叱られてしまった。理由は、無許可で部屋を飛び出したことと、少しうす寒くなった夕空で遊んでたこと。

・・・いや、別に遊んでたワケじゃないんだけど。とは言っても、無許可で部屋を飛び出したのは事実だから、シユンとなるしかなかった。

確かに、夕方の涼しい風に当たりすぎたのかもしれない。翌日になって、わたしはまたダウンした。

昨日は比較的調子が良かったのに、今日は熱も高めで、ベッドから起き上がるのが精一杯だった。

ベッドの上で、しんどい体を横たえながら、美佳のことが心配だった。

彼女は、大丈夫だっただろうか。

手術に悪影響がなければいいけど。

気が気でないわたしは、定期的に検温に訪れる斉藤さんに、思い切って彼女のことを聞いた。

「手術は定刻に始まったんだけどねえ。まだ終わってないの。長引いているみたい・・・。」

午前10時から始まった手術は、午後3時を過ぎた今も終わっていない。

想像が悪いほうに向かいそうで、思わず顔をしかめる。

斉藤さんは、「手術が終わったら、知らせに来てあげるからね。」

と言って、パタパタと部屋を出て行った。

『だから・・・わたしは40%の可能性の方を信じるようにしてるの。』

昨日、わたしが言ったセリフ。

なんか、かつこよすぎるコト言ったなあと思う。

でも、言ったからには信じなきゃ。

美佳の手術の成功はもちろんのこと・・・わたしの40%の未来も。

『ただの方便でした』ってことにするわけにはいかないんだ。

だけでも、もし手術が失敗したら？

それでも、わたしは40%の未来を信じていられるだろうか。

『やはり自分もダメかもしれない』と思ってしまいそうな気がして仕方がない。

・・・どうして、わたしはこうなんだろう。

自分の心の弱さに、少し自己嫌悪する。

40%を信じてって言い出したのは自分の方なのに。

とにかく、今は美佳の手術が成功することだけを祈ろう。

今のわたしには、それしか出来ないんだから。

そんなことを考えながら、ウトウトしていたようだ。

パタパタという音で目が覚める。

その音は、部屋のドアの前で止まり、ノックとともにドアが開いた。

そして、斉藤さんは、ドアの向こうから半分だけ顔を出し、頭の上に両腕で大きく を作った。

手術は成功した！

「やった！」

わたしは、病室の中にもかかわらず叫んだ。でも、そんなことも構わなくらい嬉しかった。

そして、いつの間にか笑顔になっていたわたしは、同じく笑顔の斉藤さんと握手を交わす。

こんな笑顔になるなんて、一体どれくらいぶりだろう。

もう忘れちゃったなあ・・・そんなこと。

2日後。

ぐんと回復したわたしの体調。

ようやく普通に歩けるようになった。

しかも、明日には退院の許可も出そうだ。

もう、車椅子は必要ない。

わたしは、自力でベッドを降りて、歩いて廊下に出た。

目指すは、美佳の病室。

斉藤さんから聞いた話では、今日は、術後、『ICU』すなわち『集中治療室』に入っている美佳が一般病棟に移る日らしい。今、ちょうど14時。

何時に病室を移動するのかまでは聞いていなかったけど、ひよっとしたら、もういるかもしれない。

わたしは、ドアの上に出されたネームプレートを確認する。

・・・進藤美佳。

しんどうみか・・・って読むのかな。

『えんどうみか』と『しんどうみか』か・・・苗字までちょっと似ているとは。

おかしい偶然に、わたしは苦笑してしまう。

そんなことを考えながらドアの前に佇んでいると、突然ドアが開いて、看護婦さんが出てきた。

その看護婦さんは、ドアの前にいたわたしとぶつかりそうになって、びっくりしていた。

もちろん、わたしも突然のことだったので、びっくりしたけど。

・・・見たことのある看護婦さんだ。

確か、手術の前日、外で佇んでいた美佳をムリヤリ部屋に連れ帰った人・・・だったと思う。

少し色白で、20代前半くらいに見えるけど、なんとなく表情が固い人っていう印象があった。

「も、申し訳ありません・・・。」

そう言っつて、看護婦さんは深々と頭を下げた。

その瞬間、部屋の中のベッドが目に入り、こっちを見ていた美佳と目が合う。

美佳は、少しびっくりした顔をしてたけど、すぐにニコツと笑ってくれた。

その笑顔が嬉しくて、わたしも笑顔を返す。

でも、看護婦さんが頭を上げると、そんな美佳の笑顔が看護婦さんの身体で隠れてしまった。

そして、何事もなかったかのようにドアを閉めようとする看護婦さんに、わたしは慌てて声をかける。

「あ、あの・・・美佳ちゃんとお話できますか・・・？」

看護婦さんは、少し首を傾げて言う。

「進藤さんとは、どういったご関係でしょうか？」

・・・どういったご関係と言われても。

トモダチ、でいいのかなあ・・・一度お話しただけだけど。どう答えようか迷っているところに、背中から聞きなれた声が聞こえた。

「あら、くるみちゃん。美佳ちゃんに会いに来てくれたの？」

その声の主は、たまたま通りかかった斉藤さんだった。

・・・助かった。

わたしは、振り返って、斉藤さんに助けを求めるような視線を送る。そんなわたしの視線に気づいてくれたのか、斉藤さんは苦笑しながら、目の前の看護婦さんに話しかけた。

「三木さん。この子が昨日話したくるみちゃんよ。美佳ちゃんと大親友なの。」

・・・大親友？

一体どんな話をしたんだろう？

・・・少し不安なんです。

「そ、そうですか・・・。先ほどまでご両親と面会されていまして、もうこれ以上は身体にさわるかと思ひまして・・・。」

「そうだったの。じゃあ、先生に聞いてみるわね。」

斉藤さんは、こともなげに言い、白衣のポケットから病院用PHSを取り出す。

そして、慣れた手つきでボタン操作をして、先生らしき人と話し始めた。

「・・・ええ。あまり時間は取らせないようにしますので。はい。わかりました。」

ピツとPHSを切つて、笑顔でOKサインをする斉藤さん。

わざわざ先生に許可まで取ってくれるなんて・・・なんていい人なんだろう。

「それじゃ、許可が出たから、5分だけ面会させてあげてね。いい？ 三木さん？」

「わ、わかりました。」

なんか、この三木さんっていう看護婦さん・・・しぶしぶという感じ。

うーん。言葉遣いはすごく丁寧だけど、ちょっと冷たい印象だし、美佳があまりいい感情を持っていないのも頷けるなあ。

早速、入室すると、美佳が笑顔で迎えてくれた。

さすがに、術後間もないので、少しぐったりしている様子。でも、思ったより元気そうで良かった。

「お姉ちゃん。アタシ頑張ったよ。」

誇らしげな顔で言う美佳。

「うん。信じてたよ。」

わたしがそう言うと、美佳は「えへへ」と笑った。

「次は、お姉ちゃんの番だよ。」

「えっ？」

「40%・・・でしょ？」

『アタシは約束を守ったから、お姉ちゃんも約束を守って。』ということがある。

美佳の、そんなストレートな言い方に思わず苦笑してしまった。そんなわたしに、美佳はおずおずと右手の小指を差し出す。

「約束・・・しょ？」

美佳の無邪気な心がダイレクトに伝わってきて、素直に嬉しい。わたしは、左手の小指を差し出して、この間と同じように指きりゲンマンをする。

指を離すと、美佳はまた無邪気に笑った。

「一緒に・・・生きようね。」

そう言う美佳の瞳は、とても澄んで、とても真っ直ぐな感じがした。

心臓という部位の手術は、予後も非常に重要だと聞いた。

手術が成功しても、予後が悪ければ、最悪『死』もありうる。

美佳は、これから予後とも戦わなくてはならないだろう。

そんな状況は、美佳だつてわかっているはずなのに、それでもわたしを氣遣つてくれる美佳。

わたしより、ずっと小さいのに・・・そのいじらしさに、わたしは不覚にも涙が込み上げてきた。

「・・・うん。」

かろうじて、こんな返事しか出来ないわたしに、美佳は、あの時と同じ言葉を返してきた。

「約束だよ?」

なんてことだろう。

これじゃ、どちらが年上かわからない。

わたしが彼女を元氣付けるつもりが、逆に元氣付けられている。

しつかりしなきゃ。

美佳に負けないように。

わたしは、込み上げる涙を堪えて、笑顔を作つて答える。

「うん・・・約束だね。」

嬉しかったので、わたしは「ウフフ」と笑い、美佳も、嬉しそうに「エヘヘ」と笑つた。

5分が経つのは早い。

三木さんが、「そろそろ時間ですので・・・。」と言つてドアを開ける。

・・・お帰りくださいってことか。

まあ、5分つて約束だったし、しょうがない。

わたしは、開けられたドアから退室することにした。  
その時、美佳が「ちょっと待って。」と呼び止める。

「そういえば、お姉ちゃんの名前・・・まだ聞いてないよ。」

思わず、振り返って美佳の顔を見る。

・・・あ、言っただけ。

記憶を辿ってみただけ、確かに教えた記憶がない。

「ゴメン。言っただけ。わたしは『塚原くるみ』っていうの。」

何故か、ニコッと笑う美佳。

「可愛い名前だね。」

「そ、そうかな・・・。」

そんなこと、あまり言われないから・・・照れてしまう。

「またね・・・くるみお姉ちゃん。」

「うん・・・またね。」

わたしは、バイバイをしてドアを閉め、ドアの前に立ったまま、目を瞑って、ため息を一つ。

・・・一緒に生きよう・・・か。

次の瞬間、そばに人の気配を感じて、目を開ける。

斉藤さんだった。

・・・待っててくれたのかな。

「美佳ちゃん、いい子ね？」

優しく微笑みながら、斉藤さんは、まるで確かめるようにわたしに聞く。

わたしは、こつくりと頷いた。

本当にいい子だと思う。

そして、すごい子だと思う。

死と戦って、打ち勝って帰還した・・・そんな強さを感じた。

満足げに微笑んだ斉藤さんは、「じゃあ、お部屋に戻りましょうか？」と言って、廊下を歩き出す。

置いていかれないように、わたしもまたついていく。

廊下の窓から差し込む陽光が眩しい。

窓の外を見上げると、今日もよく晴れていた。

こんな日に、元気になった美佳をどこかに連れ出してあげたら・・・きつと喜ぶだろうな。

そんなことを考えながら、横を向いて歩いていたので、廊下の端に置いてあったストレッチャーにぶつかってしまった。

「ガシャン！」という思ったより大きい音に、前を歩いていた斉藤さんはもちろんのこと、ナースステーションの看護婦さんたちも、みんなこつちを驚いて見る。

・・・痛かったけど、恥ずかしかったので「テヘヘ。」と笑って誤魔化した。

誤魔化したかどうかは・・・わからないけど。

病室に戻ったわたしは、斉藤さんに促されるまま、ベッドに腰掛ける。

「じゃあ、私は仕事に戻るわね。」と言って、ドアノブに手をかけて、足早に出て行くこととする斉藤さん呼び止める。

「あの・・・ありがとうございました。」

斉藤さんは、少しだけキョトンとして、フツツと笑う。

「いいのよ、気にしなくて。わたしの方こそお礼を言いたいくらいだし。」

・・・？

なんでだろう。

わたし、なんにもしてないのに。

でも、斉藤さんは、首を傾げるわたしを見て、楽しそうに笑ってる。

「多分ね、美佳ちゃんには、くるみちゃんが必要なのよ。」

「？」

「手術の前日の夕方。病室に戻った後の美佳ちゃんはすごかったわ。あんなに憂鬱そうだったのに・・・まあ元気なこと。」

そういえば、『アタシ、元気が出てきたよ。』とか言ってたっけ。

「ああいう大手術は、患者本人の気持ちも大切なものだから。」

そういうものなのか。

でも、そうだとすると、あの時のわたしの励ましも、少しは役に立ったということかな。

それなら、すごく嬉しいけど。

「これからも・・・美佳ちゃんの話し相手になってあげてね。くるみちゃんのためにもね。」

わたしのため？

「ふふ・・・これからは、美佳ちゃんに元気を分けてもらおうと良いわよ。」

あはは・・・。

なんとも返事がしづらくて、わたしは苦笑いをする。

「じゃあ、私行くわね。」

ボタンとドアが閉められ、わたしは一人になった。ベッドに腰掛けたまま、一つため息をつく。

さつき指きりゲンマンをした左手の小指を見る。

なんだか、美佳と話をする度に指きりゲンマンばかりしてるような気がするなあ。

お互いが、病魔を抱えているもの同士。

きつと、『次』のために『約束』をするんだ。

ある時突然、『次』が来ないことになるかもしれない。そんな無慈悲な想像に負けないために。

「約束は・・・守らなきゃね。」

わたしは、頭の中の美佳の笑顔に語りかけるように呟いた。  
この約束は、未来への羅針盤。  
見失わないように。  
迷わないように。  
大切にしよう。

『一緒に・・・生きようね。』  
『約束だよ？』

## 第12話 どうして

夜の9時が、この病院の消灯時間。ちなみに、面会時間は8時までだ。

消灯されると、部屋は真っ暗になるし（電気スタンドは備え付けられてるけど）、廊下も薄暗くなるのでちょっと怖い。だから、消灯時間前にトイレに行っておかないと。わたしは、ベッドから降りると、スリッパを履いて部屋を出た。

この消灯前の時間には、わたしと同じようにトイレに来る人が結構多いはずなのに、今日に限って誰もいなかった。

用を済ませたわたしは、手を洗いながら鏡を見る。少しうかない表情。

その理由は一つだった。

『結局、秋月さんはお見舞いに来てくれなかった……。』

夕方の回診で、主治医の先生が「明日、退院していいですよ。」と言うてくれた。

本来なら、喜んでいいことだろうけど、どうしても引っかかってしまっ。

必ずお見舞いに来てくれるはずだと信じて疑わなかったのに……来てくれないうちに退院しなくてはいけないのだから。

来てくれなかった理由は、いろいろと考えられる。

交通事故にでも遭って、動けないでいる……とか。

わたしという女の取扱いの面倒くささに耐えかねて、逃げ出してしまった……とか。

・・・イヤイヤ。

もうちょっと、ノーマルな理由があるはずだ。

例えば、『仕事が忙しいから』とか。

・・・!?

そういえば・・・何の仕事をしているんだろう？

29歳だし、学生時代に絵を・・・みたいなことを言っていたから、少なくとも今は学生じゃないと思う。

だけど、いつも昼間しか会わないし、その時の格好は比較的ラフ。少なくとも、会社員とかではなさそうだ。

よく考えたら、わたしは秋月さんのことを何も知らない。

どこに住んでいるのか。

何をしているのか。

そして・・・あのリストカットの痕のことも。

ふと、蛇口の水が出しっぱなしだったのに気づき、慌てて止める。

わたしは、ハンカチで手を拭きながら、モヤモヤした不安を吐き出すように、ため息をついた。

部屋に戻って、ベッドの中に入り込み、消灯時間を待つ。

間もなく、遠くの部屋からノックの音と、「電気消しますね。おやすみなさい。」という看護婦さんの声と、「パチッ」というスイッチの音が聞こえ始めた。

それが、だんだん近づいてきて、自分の部屋の番になり、ノックとともに入ってきた看護婦さんは、他の部屋と同じように電気を消していった。

真つ暗になった部屋。

窓から入る月光が、部屋の中をうつすらと照らし出す。

わたしは、目を開けたまま、天井を見つめた。

秋月さん……。

わたし、すごい子とお友達になったんだよ。

他愛のないことかもしれないけど……今すぐにでも伝えたいのに、自分がまだ生きていることがわかって、どれだけ嬉しかったか、ということも。

とにかく、秋月さんに伝えたいのに。

どうして、こんなに会いたいんだろう。

どうして、こんなに不安なんだろう。

あの雨の中、わたしを抱き締めてくれたことを忘れてなんかいないのに。

何故か、不安が消えない。

……もう会えない？

「そんなバカな。」と思う。

そんなはずはないんだ。

きつと、明日の退院の時に、花束か何かを持って現れたりするんだよ。

たまた唐突なことをするヘンな人なんだから。

……そうだとすると、まいったな。

退院に付き添ってくれる予定の母親とかち合っちゃう。

なんて説明しよう……秋月さんのこと。

本当に……まいつちやうな……。

・・・。

わたしは、いろいろなことを考えながら、そのまま寝入ってしまった。

月が雲に隠れ、月光さえ入らなくなった真つ暗闇の部屋の中。  
ドアがノックされる音で、わたしの目が覚める。

・・・？

枕元の時計は、もう1時を回っていた。  
こんな時間にノック？

少しドアが開いて、聞き慣れた斉藤さんの声が暗闇に響いた。

「くるみちゃん。起きてる？」

小声で言いながら、入ってきた斉藤さんは、わたしが起きていることを確認すると、枕元まで来てひそひそと話しかける。

「こんな時間にごめんなさいね。ちょっといい？」

わたしは、少々寝ぼけまなこだったけど、斉藤さんは今晚夜勤だったのか・・・なんて思いながら頷いた。

「くるみちゃんを病院まで運んでくれた、あの秋月さんのことなんだけど・・・。」

ドキッとした。

まさか、斉藤さんの口からその名前が出てくるとは思ってもみなかった。

「実は、さっき・・・11時頃かしら。この病院に搬送されてきているの。」

「えっ！」

わたしは、声を出して驚いた。

『なぜ?』という疑問が、頭の中を駆け巡る。

どこかケガでもしたんだろうか。

いっぺんに眠気が吹き飛んでしまったわたしは、ベッドの上で上半身だけ起きて斉藤さんを見た。

斉藤さんは、真剣なまなざしで、言葉を続ける。

「くるみちゃん。落ち着いて聞いてね。いい?」

気を持たせるような言い方をする斉藤さん。

正直、「じれつたいな。」と思いつつ、頷いて次の言葉を待つ。

「・・・秋月さんは『末期癌』なの。」

・・・え?

ガン?

マツキ?

一体、何を言っているんだろう?

冗談にしか聞こえない。

わたしは、首を傾げた。

「秋月さんと話をする事が出来るのは、今しかないかもしれない。」

「イマシカナイカモシレナイ？」

「斉藤さんの顔を見ながら、この病室が、急に現実感がなくなったような気がした。」

「まるで、夢の続きでも見ているかのような。」

「でも、とても真剣な斉藤さんの表情から、とても張り詰めた空気を感ずる。」

「その雰囲気が出ている・・・これは本当のことだと。」

「病室まで案内するから、来て頂戴。いいわね？」

「・・・正直言つて、状況がよく飲み込めていない。」

「でも、会えるのなら、会わなくちゃ。」

「会えば、何もかもハッキリするだろう。」

「わたしの頭は、そんな明確な答えをはじき出す。」

「わたしは即座にベッドを降りて、斉藤さんに向かって力強く頷く。」

「斉藤さんは答えるように頷き、音を立てないように、こっそりとドアを開けた。」

「そのまま廊下の様子を伺ってから、わたしを手招きする。」

「エレベーターに乗ってワンフロア上の7Fへ。」

「深夜の病棟の廊下は不気味だった。」

「他の入院患者に迷惑にならないように、まるで泥棒のように、こそこそと廊下を歩くわたしたち。」

「7Fに到着し、斉藤さんがエレベーターを降りると、わたしもそれに続いた。」

「斉藤さんは、『秋月幸太』のネームプレートのある個室の前で立ち」

止まり、小さくノックをしてからドアを開け、わたしに部屋に入るよう促す。

胸がドキドキと高鳴っていた。

この静かな病室に、心臓の音が聞こえてしまうのではないかと思えるくらい。

こんな時間だから当然だけど、部屋の蛍光灯はついていない。ついているのは、ベッド脇の電気スタンドの明かりだけ。

その明かりの中に浮かび上がっているベッドには、誰かが寝ているようだった。

ただ、起きてくる気配はない。

見舞い客用の丸イスを、斉藤さんはベッドの枕元近くに置いてくれた。

ここに座れ・・・と言うことだろう。

「何かあったら、すぐにナースコールボタンを押して、ね？」

斉藤さんは、小声でわたしに告げる。

わたしが頷くと、斉藤さんはドアを開けて退室していった。

残ったのは、しゃべるのがはばかられるような静けさ。

とりあえず、わたしは、丸イスに座ってベッドの中の顔を覗き込んだ。

「っー」

その顔は、間違いなく秋月さんだった。

ただし、いつもの銀色フレームのメガネはかけていない。

そして、寝ているのではなく、いつもよりも弱い眼光で、わたしを

見つめている。

顔色も悪く、頬も多少こけていた。

あれからたった1週間。

なぜ、こんなに変わってしまったのか、わたしは信じられなかった。

顔をこちらに向けることすら億劫そうに、でも彼は嬉しそうに口を開いた。

「ありがとう・・・来てくれて。」

弱々しい口調だった。

こんなに静かな病室でなかったら、聞き取ることが困難だったかもしれない。

困惑し、しゃべることすら出来ないわたし。

そんなわたしを見ながら、彼は言葉を続けた。

「別に、隠すつもりはなかったんだ。」

「・・・。」

「実は、甲状腺の悪性腫瘍だね。」

「・・・。」

「見つかった時は、手遅れだった。」

「・・・。」

「今年の3月に、余命6ヶ月の宣告を受けたんだよ。」

今は9月。

簡単な計算結果に、目の前が一瞬暗くなった。

甲状腺の悪性腫瘍。

余命6ヶ月。

これだけで、目の前の状況を把握することが出来るはずなのに、やっぱりわたしには理解できない。

いや、理解できないというよりも、理解することを拒んでいるのかもしれない。

「どうして……。」

わたし、死なずに済んだんだよ？

美佳ちゃんだって、成功率40%の手術に打ち勝って、生きてるんだよ？

なのに……どうして、秋月さんだけが死ななくちゃいけないの？

「どうして……。」

つい先週までは、あんなに元気そうだったのに。

「どうして……。」

わたしは、オウムのように、同じ言葉を3回繰り返していた。

目の前の状況が、著しく理不尽なものに感じられて仕方がない。

その理不尽さが、目の前の状況を、そのまま受け入れることを拒否していた。

そんなわたしの『どうして？』に、秋月さんは答える。

「……罰……かな。」

「罰？」

唐突な単語。

何が何の『罰』なのか・・・さっぱりわからない。

わたしは、丸イスに座ったまま、秋月さんを見ながら首を傾げた。

そんなわたしを、彼は涼しげな瞳で見つめる。

いつもの笑顔で。

でも、少しだけ物憂げな表情で。

### 第13話 罪と罰

それは、僕が23歳の春。

高校から付き合い続けていた彼女、新庄今日子（しんじょうけいこ）と、大学卒業と同時に式を挙げた。  
仲間たちの祝福は、僕たちの心にたくさんの潤いと彩りをくれた。  
そして、間もなく、僕たちは新たな生命を授かった。

娘、春香（はるか）

父になった僕と、母になった今日子。

始まったばかりの新しい家庭は、とても温かく、僕を優しさで包んでくれる。

強くならねば、と思う。

このステキな家庭を守るのは僕の役目なのだから。

僕にとって、春香を見守ることが何よりの楽しみだった。

初めて寝返りを打った時も。

初めて歩いた時も。

初めて「パパ」と言ってくれた時も。

やがてランドセルを背負った小学生に。

やがてセーラー服を纏った中学生に。

やがて「お父さんクサイ！」なんて言うような高校生になるのだから。

そして、いつかはウェディングドレスを着て、花束を手渡してくれる日が来るだろう。

そんな日が、必ず来ると信じていた。

そんなある日のこと。

仕事の繁忙期が終わり、久しぶりに日曜日に家で休む僕に、先日5歳になったばかりの春香は「パパア！」とハイテンションでまわりついてくる。

正直、仕事で疲れていたけれど、ここのところ構ってあげられなかったし、しょうがないか。

洗いものをしている今日子に、「今から公園に散歩に行かないか。」と提案する。

「こつえんだ！」と言って大喜びの春香。

今日子も、『じゃあ行きましようか。』と言ってくれると思っていたが、今日に限って違った。

「ごめんなさい。今日はちょっと頭が痛くて……。家で休んでいい？」

お出かけ好きの今日子にしては、珍しいこともあるものだ。だけど、そういう理由なら仕方がない。

僕と春香の二人で、公園まで散歩することにした。

元気に動き回る春香と、仕事で疲れている身体にムチ打って歩く僕。傍から見ると、非常に対照的だったかもしれない。

公園に行く途中で通る、少し大きめの交差点。

歩行者信号が『赤』だったので、僕たちは『青』に変わるまで待つ。

「ねえねえパパ！ しんごうがあおになったら、どっちがむこうまではやくつくかきょうそうしよう！」

「おいおい。パパは仕事でお疲れだから勘弁してよ……。」

僕は、春香の底なしの元気に苦笑した。

そして、歩行者信号が『青』になり、それを知らせる電子メロディが鳴り始めると同時に、横断歩道を駆け出した春香。

その一瞬だけが、妙に生々しいスローモーション。

そして、その一部始終が、僕の脳裏に濃く焼きつく。

異常なほど場違いに感じる、青信号を知らせる電子メロディ。

無遠慮に、遠巻きにこちらを眺める野次馬たち。

血まみれのまま、ぴくりとも動かない春香。

まるで白昼夢。

僕は、呆然と立ち尽くす。

未来なんて、一瞬で消えうせるものだと、今初めて知った。

後悔は何も生み出さないとわかっていても、後悔にとらわれずにいられない。

なぜ、手を繋いでおかなかったのだろう。

なぜ、「危ないからやめなさい。」の一言が言えなかったのだろう。

なぜ、僕は身を挺してでも守ってあげることが出来なかったんだろう。

仕事で疲れていたなんて理由になるものか。

僕は、春香を守れなかった……だから、春香は……死んでしまった。

後悔が、四六時中、僕の頭の中をのた打ち回る。

「仕方なかったんだよ。」と人は言う。

「気を落とすすぎるなよ。」と人は言う。

「元気出しなよ。」と人は言う。

死にそんな程落ち込んでいる僕を、みんなが心配している。

それは、頭では理解できていたつもりだ。

でも、それすら重荷。

だから、そんな優しい台詞を僕は必死で打ち消す。

くそくらえだ。

お前たちに、何がわかるというんだ？

そんな刺々しい態度しか出来ない僕に、友人たちはかける言葉を失っていく。

やがて、僕に話しかける友人は、一人もいなくなった。

別に構わなかった。

重荷が、一つ少なくなっただけだから。

そんな僕に、今日子は「二人で寄り添って生きていこう。」と言ってくれた。

でも、ダメなんだ。

僕は、どうしても僕を許すことが出来ないから。

「離婚しよう。」

僕の言葉に、今日子は泣いた。

仕方がないんだ。

だって、今日子と一緒にいたら、いつか僕は僕を許してしまうだろう。

でも、許してしまったら、春香の魂はどこに行けばいい？

春香の魂の行き場が、なくなってしまういそうな気がするから、きつと一緒にいてはいけない。

それが、僕の出した結論だった。

全ての、人と人とのつながりを放棄して、一人ぼっちになった僕。

それでも、後悔は僕を責め続けた。

あの瞬間は、何度でも何度でも、まるで拷問のように頭の中でリプレイされる。

いつしか、睡眠薬なしでは眠れなくなった。

僕にとって、寝ている時だけが唯一の休息になった。

ある日の夜、夢を見た。

春香が、僕に駆け寄ってくる。

「パパ。抱っこして！」

帰ってきてくれたんだね、春香。

良かった・・・僕はキミが死んでしまった夢を見ていたよ。

僕は、春香をいつものように抱き上げる。

ついでに、ほっぺをスリスリしたら「おヒゲが痛い！」と嫌がられた。

あはは。ゴメンゴメン。

でも、そんなことにすら幸せを感じる。

僕は、春香を降ろして、手を繋いで歩き出す。  
どこに行こうか。

そつだ。ママも一緒に、春香の大好きな、あの夕陽を見に行こう。  
手を繋いだままの春香が、僕を見上げて話しかけた。

「ねえ、パパ？」

「なんだい？」

「どうして……。」

どうして守ってくれなかったの？

「っ！」

声にならない叫びとともに、僕は跳ね起きた。  
びっしよりの寝汗。  
涙で濡れた枕。

はああ、と息切れがする。  
涙が止まらない。

僕は、顔を洗うために洗面所に立ち上がった。

水を出して顔を拭う。

蛇口を閉めるのも忘れて鏡を見ると、映ったのは自分の疲れた顔。  
もう、睡眠すら僕に休息をくれない。

絶望とともに、頭の中に浮かんだ思いが、僕の胸を締め付けた。

守るべき家庭を守れなかった。

愛する春香を守れなかった。

幸せにすると誓った今日子を泣かせてしまった。

それらは、全て僕の罪。

罪は、罰によって贖われなくてはならない。

僕は罪人。

ならば、罰を受けなくちゃいけないんじゃないか？

すぐ目の前にある安全かみそり。

僕は、それを手に取った。

でも、震える手で左手首を何度切りつけても、所詮、安全かみそりでは致命傷にはなるはずもない。

それは、まるで『自ら命を絶ったくらいでは贖罪になんてなるものか』と言われているかのように。

僕の左手首には、リストカットの痕だけが残った。

それから、わずか1週間後のこと。

病院の診察で、甲状腺の悪性腫瘍が見つかる。

もう手の施しようがなかった。

余命6ヶ月。

「くくく。」と僕は笑った。

タイムリミットが設定された僕の命。

これが・・・『罰』か。

何故だろう。

あんなに、ざわざわと落ち着かなかった心が、奇妙に落ち着いてしまった。

そして、僕は、不思議な安堵感を感じていた。

## 第14話 涙のキス

耳が痛くなるような静寂な病室。

ベッドに横たわる秋月さんと、枕元の丸イスに腰掛けているわたし。その間で、控えめな明かりを灯す電気スタンド。

そんなほのかな明かりが、白い病室の壁に、大きくぼやけたわたしの影を映し出していた。

驚いて言葉も出ない。

結婚していたこと。

娘がいたこと。

そして・・・その娘を亡くしていたこと。

その全てが、わたしの知らない秋月さんだった。

どこか物憂げな雰囲気があったのは、こんな悲しい過去があったからだったんだ。

「僕に残された6ヶ月。」

「.....」

「その間に、絵を一枚描こうと思ったんだ。」

「絵？」

秋月さんは、ゆっくりと頷く。

「学生時代に好きだった絵を・・・『生きた証』を遺したかったん

だ。」

「生きた・・・証。」

「でも、描きたいものが見つからない。」

「・・・。」

「時間だけが過ぎていって・・・もうダメかと思いかけていた。」

「・・・。」

「そんな時、キミに出会ったんだ。」

死ぬことしか考えていなかったわたし。

『生きた証』を遺すために、あがいていた秋月さん。

そんなわたしたちが出会ったのは、あの雑居ビルの最上階。

9月の青空。

屋上特有の乾いたビル風。

あちこちがさび付いた貯水槽。

あの場所のことは、わたしの記憶に細かく残っている。

わたしにとって、特別な場所だから。

「なんで、わたしを描こうと思ったの？」

思い切って、前から思っていた疑問をぶつけてみた。

秋月さんは、笑みとともに答える。

「キミが・・・天使に見えたからだよ。」

天使？

わたしは、呆気にとられた表情で、秋月さんを見た。

秋月さんは、「くくく。」と意味ありげに笑った。

「だって、キミは僕を救ってくれた。」

え？え？

救ったことなんかない。

むしろ、わたしの方がたくさん救われたのだから。

でも、秋月さんは笑うばかりで、それ以上答えようとしなかった。

やがて、わたしたちが押し黙ると、再び部屋はシンと静まり返る。

そんな中で聞こえてくるのは、秋月さんの少し荒い呼吸・・・苦しそうな吐息。

いつの間にか、秋月さんの額には汗が滲んでいた。

わたしは、ハンカチを取り出して汗を拭く。

そして、ナースコールボタンのある場所を確認しようと、辺りを見渡した時、秋月さんは「いいんだ。」と言った。

ハッとしたわたしは、秋月さんの顔を見る。

「キミは、まだ・・・死にたいと思ってる？」

・・・え？

唐突な質問に少し驚いたけど、でも、すぐに思い出した。

初めて会った時、貯水槽の傍らに一緒に座った時の秋月さんの台詞だ。

あの時は・・・わたし、返事をしなかったっけ。

「もう・・・思っていないよ。」

わたしは、首を横に振りながら答える。

それが、今のわたしの本音。

もう、あの時とは違うんだ。

秋月さんは、じつとわたしの目を見ている。

でも、わたしは瞳をそらさない。

だって、美佳と約束したんだから。

それは、とても大切な約束だから、もう自ら命を絶つなんて考えられない。

本当に、そう思うから・・・瞳をそらさなかった。

目を合わせていたのは、ほんの数秒。

秋月さんが、根負けしたように、ふつと微笑みながら言った。

「やっぱり、僕は・・・キミに出会えて、本当に良かったよ。」

その笑顔は、今まで見せたどんな笑顔よりも蕩けるような笑顔だった。

・・・なんて、素敵な、嬉しそうな笑顔をするんだろう。

思わず、胸がドキドキしてしまう。

わたしは、その笑顔に心をときめかせ、まるで最後のお別れのような言葉にキューツと心が締め付けられる。

例え、受け入れたくない現実だとしても。

例え、受け入れなくてはいけない現実だとしても。

例え、それが頭の中でわかっていたとしても。

割り切ることなんて・・・出来ない。

出来るわけが・・・ない。

もし、『奇跡』というものが存在するなら、今、ここで起きてほしいと思う。

一度だけでいいんだ。

もう一度だけ・・・あの夕陽を一緒に見たい。

あの鮮やかなオレンジ色に染まった街並みを。

そんな、ささやかな奇跡を・・・もう一度だけ。

でも、そんなことを考えるわたしの顔は、ひよっとしたら泣きそうだったのかもしれない。

「・・・泣かないで。」

秋月さんの言葉に、ハツとなるわたし。

そして、さっきのように、蕩けるような笑顔で秋月さんは言う。

「キミには、きっと・・・笑顔の方が似合うから。」

また、顔が赤くなっただのがわかった。

そんなこと言われたの初めてだよ。

なんだか、肩の力が抜けて、心が落ち着いたような気がする。

・・・なんてだろう。

背中がむず痒くなるようなことを言われたからかな。

不意に、秋月さんの掛け布の中から、ごそごそという音がした。一瞬、何の物音かわからなかったので、首を傾げていると、ゆっくりと掛け布の中から現れた両手が、わたしを手招きする。そして、秋月さんは、優しい笑顔で「おいで。」と言った。

あの雨の日のことを思い出す。

抱き締めてもらいながら、胸がドキドキしていたことを。

そして、今も、わたしの胸はドキドキしている。

あの雨の日と同じように。

わたしは、ベッドの前に跪くと、秋月さんの身体に負担を掛けないよう、ゆっくりとわたしの頭と両手を、秋月さんの胸板に乗せた。

そして・・・秋月さんの左手が、わたしの背中をふわりと包み込む。

背中のパジャマ越しに感じる、秋月さんの手は、暖かった。

その左手が、背中をぽんぽんしてくれている。

「暖かいね。」

秋月さんが囁きに、わたしは「・・・うん。」と答える。

わたしも、秋月さんも・・・もう言葉を発しなかった。

お互いがお互いの温もりを、確かめ合うように。

心の底から安らぎを感じた、あの雨の中。

その雨の中で、確かに信じることの出来た、わたしの居場所。

それは、今にも消え入りそうだけど、とても大切な場所。

だから・・・

・・・いつまでもこうしていたい。  
・・・このまま、時が止まってほしい。

ただひたすら、そう願った。

雲に隠れていた月が、また顔を出し、窓から、うつすらと差し込む  
優しい月光。

さつきより、わずかに明るさを増した部屋。

わたしは、ぼんぼんしてくれる背中が、ただ愛おしかった。

この静まり返った夜の病室で、どれくらいこうしていただろう。  
とても長い時間だったような、あつという間だったような。

突然、秋月さんの小さい呟き声が病室に響いた。

「この間・・・夢を見たんだ。」

「・・・夢？」

「キミが、鳥になって・・・空を飛んでいく夢を。」

「・・・それは、楽しそうだね。」

「少し、よろめきながら・・・でも、すごく気持ち良さそうだった。  
」。

「……。」

「もう……大丈夫だね……。」

「?……あき……づきさん?」

返事はなかった。

その代わりに、わたしの背中をぼんぼんしてくれていた左手が、ぜんまいが切れたように、ゆっくりと……止まる。

こらえていた涙が、瞳から溢れた。

まるで、堰を切ったように。

イヤだよ……。

一人にしないでよ……。

お願いだから……もっと一緒にいてよ……。

そして、わたしの中の本音が、口から漏れる。

もう……一人じゃ生きていけないから。

あの12歳の夏から、わたしは、ずっと一人だった。

忌々しい灰色の世界は、一人では決して抜け出せなかった。

でも、秋月さんと出会い、わたしは一人じゃなくなつた。

二人だったから、わたしは少しだけ強くなれた。

二人だったから、わたしは『楽しい』という気持ちを思い出せた。

だから、もう戻れない。

もう、一人にはなりたくない。

そう思った瞬間だった。

「・・・それでいいんだよ。」

秋月さんの囁き声に、驚いて顔を見上げる。

「人は、一人じゃ生きていけないものだから。」

それは、聞き取るのも困難な、小さな声だった。

「辛い時は、寄り添えばいい。」

まるで、最後の力を振り絞るかのように。

「苦しい時は、頼ればいい。」

聞き逃したりしないように、わたしは・・・ただ耳を澄ました。

「キミは、・・・一人なんかじゃない・・・。」

涙は、途切れなく頬を伝う。

いつまでも尽きない涙。

でも、今だけは、いくら泣いたっていいじゃないか。

次々に零れ落ちる涙が、秋月さんのパジャマを濡らしていく。

12歳の夏。

わたしを気遣って、笑うのをやめた美加。

それが、美加の優しさ。

でも、わたしは、笑わなくなった美加を見るのが辛かった。だから、わたしは、美加の優しさから逃げてしまったんだ。

美加だつて、きつと辛かつたはずなのに、そんなことに気づきもせず、ただ、二人で傷つけあつてしまった。

もし、あの時、美加の優しさから逃げることなく、正直に自分の想いをぶつけることが出来ていたら・・・。

美加の優しさに寄り添うことが出来るほど、わたしの心が強かつたら・・・。

きつと・・・わたしたちは、今でも親友でいられたに違いない。

辛い時は、寄り添えばいい。

苦しい時は、頼ればいい。

まるで魔法のような言葉。

その言葉は、あの12歳の夏に、わたしが取るべきだった正しい選択肢を教えてくれた。

同時に、これから、わたしが進むべき未来への歩み方も、はっきりと示してくれたような気がした。

一気に胸が軽くなり、心の表面を覆っていた氷が解けたような気分になる。

・・・でも、秋月さんの声は、もう聞こえない。

わたしは頭を起こして、秋月さんの顔を見る。

あの涼しげな瞳は、もう閉じられていたけど、かすかに唇が動いた。

「ありがとう・・・。」

多分、そう言ったと思う。

そして、唇は動かなくなつた。

残されたのは・・・淡い明かりと静寂。

・・・奇跡は、起きなかった。

『キミに出会えて、本当に良かった。』

そう言った時の、あの秋月さんの蕩ける様な笑顔を・・・もう見ることはないだろう。

それは、とても悲しいことだけど、今は、憑き物が落ちたように、澄んだ気持ちになれたことが同じくらい嬉しかった。

最後まで、わたしを救ってくれた、わたしの大切な人。

好きだよ。

わたしは、そう呟きながら、顔を、彼の顔に近づけた。

自分の唇が、彼の唇に触れる。

生まれて初めてのキスは、涙の味だった。

## 第15話 天使

例え、大切な人がいなくなっても、時は止まることはなく、季節もまた変わり続ける。

当たり前のことなのに、それを初めて実感した10月。高くなった空は、秋の訪れを告げていた。

そんな、とある水曜日。

あの非日常から日常へ戻ったわたしは、いつもどおり、通院のために病院にいた。

6F。

わたしは、何度か訪れたことのある病室のドアをノックする。

「ど・お・ぞ〜。」

少しおどけた子どもの声が聞こえた。

わたしは、苦笑しながら、「お邪魔します。」と言って入室する。

「こんにちは、くるみお姉ちゃん！」

ベッドの上で、上半身だけを起こして、元気一杯の美佳。わたしまで元気になってしまいそう。

「美佳ちゃん。元気にしてた？」

「もちろん！」

あまりに元気すぎる美佳に、わたしは苦笑してしまった。緑色のヘアバンドで束ねている髪の毛がつつやだ。

昨日は、洗髪の日だったんだろうか。

「体は大丈夫？」

元氣そうに見えるけど、患部は心臓。

一応確認する。

「うん。もう大分良くなってきたって、先生が言ってた。」

「そう。じゃあ、もうすぐ退院？」

「うん、早ければ来週だって。」

「良かったね。」

まるで、自分のことのように嬉しい。  
でも、何故か美佳の表情が少し曇った。

「・・・どうしたの？」

美佳は、少し口を尖らせて言う。

「だって・・・退院したら、くるみお姉ちゃんと会えなくなっちゃ  
う。」

わたしは、思わずクスクス笑ってしまった。  
案の定、美佳はほっぺを膨らませる。

「なんで、おかしいの？」

「大丈夫だよ。わたしは毎週水曜日の午後、ここにいるから。」

「あ、そっか。」

「また、会えるよ。」

美佳が、わたしに会いたいと言うように、わたしも美佳に会いたい。いつだって、美佳はわたしに元気をくれるから。でも、それを言うのは、ちょっと照れくさいから言わないでおこう。

「じゃあ、アタシも毎週水曜日に通院するようにしようかなあ。」

「それ、いいかも。」

わたしと美佳は、目を見合わせて笑った。そして、美佳は、左手の小指を差し出す。

「じゃあ、約束!」

「何を約束しようか?」

「毎週水曜日は、この病院で遊ぼう!」

・・・むむ。

病院で遊ぶのもどうかと思うけど、まあいいか。

「しょうがないなあ。じゃあ、美佳ちゃん。毎週水曜日、ちゃんと通院してね?」

そう言って、わたしは右手の小指を差し出して、指切りゲンマンを

する。

わたしが退院した後、毎週水曜日は、こんな感じで美佳とお話をしていた。

いつも、アツという間に時間が過ぎる。

あまり長くいるのもアレなので、ほどほどのところでお暇する。

「また来るね。」

「また来週・・・約束だよ。」

病室のドアの閉め際に、美佳は言う。

わたしは、バイバイをしながらドアを閉めた。

いつも美佳は元気だ。

本当に元気すぎるほどに。

もともとの性格も快活なんだろうけど・・・でも、少しムリをしているようにも感じる。

それは、おそらく不安の裏返しなんだと思う。

胸に出来た手術の傷跡。

いつ現れるかわからない合併症や後遺症。

そんな限りない不安から逃れるために。

そして・・・それはわたしも同じ。

いつ訪れるかわからない発症の瞬間。

以前のわたしなら、生きること执着していなかったから別に気にならなかつたけど、今は違う。

わたしは生きたい。

だからこそ、余計に死ぬのが怖かった。

毎週の検査が怖い。

検査の結果を聞くのが怖い。

いつ「異常アリ」と言われるだろうか。

発症の徴候が出ていたら、どうする？

それは、わたしが死ぬまで毎週毎週続いていく。

・・・気が遠くなりそうだった。

わたしは、エレベーターに乗り込んで、1Fのボタンを押す。

すでに検査も終わっていたので、家に帰るだけだった。

1Fに着いたエレベーターから降りて、エントランスに向かう。

その途中、ふと待合スペースの一角が目に入った。

そこは、秋月さんに『絵のモデルになってほしい。』と言われた場所。

今は、見知らぬお婆さんたちが座って、おしゃべりをしていた。

胸が、チクチク痛む。

これが、『遺された者の辛さ』なのだろうか。

初めて会った時、『キミは・・・遺される者の辛さを知るべきだ。』  
って言っていたのを思い出す。

彼は、それを教えてくれた・・・こんな形で。

それなら、もう一つだけ教えてほしい。

この怖いと思う気持ちを、どうやって乗り越えればいい？

不意に立ち止まって、待合スペースを見渡す。

無意識に秋月さんの姿を探してしまっただけから気づく。

こんなところに、いるはずはないのに。

「・・・もう・・・いないんだよ。」

わたしは、天井を見上げながら、独り言のように呟く。

もちろん、吹き抜けのホールの高い天井は、何も答えてはくれなかった。

その時、2Fフロアから、わたしのいる1Fに向けて、見下ろしながら手を振る看護婦さんが視界に入る。

「誰？」と思つて、目を細めてよく見ると、その人は斉藤さんだった。

斉藤さんは、わたしの入院していた一般病棟の看護婦さんなので、退院してからは会う機会が全くなかった。

だから、会うのは久しぶりなんだけど、そんなことを感じさせないような笑顔で、1Fまで降りてきてくれた。

「くるみちゃん。久しぶりねえ。その後体調はどう？」

相変わらず人懐っこい口調だった。

わたしは、笑顔で会釈を返す。

「いつも、美佳ちゃんのところへ寄ってきてくれてありがとうね。」

改めてお礼を言われると恥ずかしい。

それに、わたしが寄りたくて寄っているのだから、お礼を言われるようなことでもないし。

「いえ・・・わたしの方こそ。」

少し、顔を赤らめて答える。

「間に合って良かったわ。帰る前に声をかけなきゃと思っていたから。」

「・・・わたしに？」

「そう。今日、くるみちゃんが来るのを待っていた人がいるのよ。」

「わたしを待ってた人？」

「新庄今日子っていう人なの。今から会ってもらえる？」

は、はあ・・・。

しんじょうきょうこ・・・どこかで聞いたことがあるような。

「大丈夫よ。ヘンな人じゃないから。ついて来て。」

そう言つて、エントランスとは別の方向に歩き出す斉藤さん。

わたしは、慌てて後をついていく。

まあ、斉藤さんがそう言うなら・・・むげにも断れないし。

辿りついたのは、『カンファレンスルーム』という部屋だった。

斉藤さんは、ドアを開けて、「お待たせ。」と言いながら中に入り、わたしも続いて中に入る。

カンファレンスルームという部屋には初めて入ったけど、なんか会議室みたい（ていうか実際にはミーティングルームとして使用されているらしい。）だ。

飾り気のない長机が4つ、口の字型に並び、折りたたみ式のスチール椅子が長机に一つずつ備え付けられている。

そして、ホワイトボードや大画面テレビなどの業務用と思われる機材が、隅っこに並べられていた。

4つあるスチール椅子にの一つに、『新庄今日子』と思われる女性が座っていた。

その女性は、斉藤さんに「ありがと。」とにこやかに手を振ると、立ち上がって、わたしに向けて会釈をする。

わたしも釣られて会釈をした。

「こちらが新庄今日子さん。あの秋月さんの・・・も、元奥さん、ね。」

斉藤さんは、少しどもりながら紹介してくれた。

その説明で思い出した。

そうだ。確か、秋月さんが23歳で結婚した時の相手の人・・・だったはず。

「ゴメン。それじゃわたし巡回が残ってるから行くわね。ゆっくりしてって。」

そう言っつて、斉藤さんは、またパタパタと部屋を出て行く。いつも忙しい人だなあ。

部屋に残されたのは、わたしと新庄さんの二人だけになった。

「ごめんなさい。突然でびっくりしたでしょ？」

新庄さんは、申し訳なさそうに話しかけてきた。

よく見ると、年の頃は30歳前後だろうか。

化粧は薄めだが、上品なピンク色のルージュが目を引いた。

少しウェーブの入ったショートカット。

シックな薄いブラウンのブラウスに、濃いブラウンのセミロングのタイトスカート。

同色系統の服をうまく着こなしている様は、才媛さを感じさせる。一言で言えば『美人』だった。

とりあえず、いつまでも見とれているわけにはいけないので、「いえ・・・」とだけ答えておく。

明らかにドギマギしているはずのわたしを気にするでもなく、彼女は言葉を続けた。

「とりあえず座りましょうか。」

新庄さんは、スチール椅子に座りながら、わたしにも座るよう促す。わたしは、彼女の真意が掴めぬまま、スチール椅子に座った。

そして、新庄さんは、斉藤さんが出て行ったドアを見ながら口を開いた。

「斉藤さんとはね、昔同僚だったのよ。」

「ど、同僚・・・?」

わたしは、とっさに意味がつかめなかった。

慌てた様子のわたしを見て、彼女は優しく微笑む。

「若い頃、私もこの病院に看護婦として勤務していたの。」

「そうだったんですか。」

「今は、やめてしまったけどね。」

彼女は、言い終わってからペロツと舌を出す。

愛嬌を感じる魅力的な仕草だった。  
でも、それなら斉藤さんと仲が良さそうに見えたのも納得だ。  
そんな他愛のない会話は、遠くから聞こえた救急車のサイレンの音  
に中断させられる。  
どうやら急患のようだ。  
音が聞こえなくなるのを待って、改めて彼女が口を開いた。

「ちょっと・・・幸太クンの話をしているかしら？」

「こ、こうたクン？」

わたしは思わず素っ頓狂な声を出してしまい、慌てて両手で口を押さえる。

彼女は笑っていた。

「うふふ。秋月幸太のことよ。」

「そ、そうですね・・・。」

わたしは、自分のことを「馬鹿だなあ」と思いながら、その恥ずかしさに下を向いてしまった。

あれから、もうすぐ1ヶ月。

まさか、元奥さんとお話することになるとは思ってもみなかった。

「実はね、幸太クンから、9月の初め頃に電話があったの。」

9月初旬？

わたしが秋月さんと初めて出会った頃、だろうか。

「その時、なんて言っていたと思う？」

想像もつかないので、わたしは首を傾げる。

「『天使に出会えた』って。」

「……天使!？」

そういえば、以前、秋月さんが言っていた。

『キミが……天使に見えたからだよ。』

その後、秋月さんは意味ありげに笑っていたことを思い出す。  
一体、どうして『天使』だったんだろう？

「春香の話は……聞いたかしら？」

「……交通事故だったんですよね？」

「そう。守ってあげられなかった自分を……ずっと責め続けてね・  
……。」

「……。」

「あれは……見てて不憫になるくらいだったわ。」

新庄さんは、視線を宙に浮かせて、遠い目をしながら言った。  
まるで、辛い過去を思い出すかのよう。

確かに、秋月さん自身も『自分を許せなかった』って言っていた。  
でも、それが、どう天使につながるんだろう？

「だから、ね。今度こそ・・・守りたかったんじゃないかしら。」

新庄さんは、まっすぐわたしの顔を見つめながら言った。

「?・・・あの・・・守りたかったって?」

意味がわからないわたしは、当惑気味に聞き返す。

すると、新庄さんは、ニコツとしながら答えてくれた。

「もちろん、あなたのことを、よ。」

・・・え、わたし?

驚くわたしを見て、何故か新庄さんは嬉しそうな笑顔だった。

「多分ね、この命に代えても・・・くらい思っていたかもしれないわね。」

あ・・・。

初めて出会った日・・・左手首に巻かれた、血染めの白いハンカチ。何故、こんな怪我をしてまで、わたしの自殺を止めたのかって、ずっと疑問に思っていた。

でも、今、ようやくあの時の秋月さんの気持ちが少しわかったような気がした。

そんな納得顔のわたしに、新庄さんは、笑みを消した神妙な顔つきで言う。

「一つ、聞いてもいい?」

少し雰囲気の変った新庄さんに戸惑いながら、「・・・は、はい。」

「と、心持ち背筋を伸ばして答える。」

「あなたは・・・幸太クンに救われた？」

新庄さんの瞳が、じっとわたしを見つめているのがわかる。

・・・そうだ。

秋月さんがいなければ、わたしはもう生きてはいなかった。

あの雨の中で、『生きてていい』と言ってくれた。『辛かったね』  
とも言ってくれた。

そして、死の間際まで、わたしに大切なことを教えてくれた。

それは言葉では言い表せないくらい・・・わたしは救われたんだ。

だから、わたしは、真剣な雰囲気を漂わせる新庄さんに負けないように、強くはつきりと頷いた。

そんなわたしを見て、新庄さんは、さっきまでの固い表情が嘘のように、とても嬉しそうな表情で言った。

「なら、きつと・・・幸太クンも同じくらい救われたはずよ。」

ハツとした。

『だって、キミは僕を救ってくれた。』

あの秋月さんのセリフが、頭の中をリフレインする。

救ってあげたつもりなんか全然なかった。

でも・・・。

「幸太クンにとってはね、あなたを救うことが最後の望みだったんだから。」

わたしは、知らないうちに秋月さんを救っていた？

「そうね・・・あなたを救うことで、自分も救われたかったってことかしらね。」

頭を殴られたような衝撃を感じた。

・・・そうだったのか。  
思わず下唇を噛むわたし。

遅いね・・・。  
今頃、気づくなんて。

わたしは、ずっと誰かに助けてほしいと思っていた。  
一人ぼっちの灰色の世界で、途方にくれながら。  
ただ、助けの手が差し出されるのを待っていた。

でも、それは、わたしだけじゃなかったんだ。  
秋月さんもまた・・・誰かの助けを必要としていたんだ。

そんな秋月さんの辛さに、気づいてあげられなかったのが悔しい。  
胸の奥が・・・締め付けられるような気がした。

下唇を噛んだまま俯く私に、新庄さんは、ことさら明るい声で言った。

「そんな天使さんにね・・・幸太くんからの贈り物。」

新庄さんは、壁に立てかけて置いてあった薄手のキャリーバッグを持ち上げて、椅子の上に置いた。

チャックを開け、中から出てきたのは……一枚の額に入れられた絵だった。

わたしは、その絵に思わず息を飲んだ。

天使。

……鮮やかなオレンジ色の夕陽をバックに。

……空に向かって手を伸ばしている、わたしによく似た横顔の天使。

二人で手を繋いで見た、あの夕陽。

わたしの顔をスケッチする、秋月さんの真剣な顔。

あの涼しげな瞳も。

銀色フレームのメガネも。

時折見せた物憂げな表情も。

わたしの脳裏に、浮かんでは消えていく。

「この間、幸太クンの住んでいたマンションを引き払った時に部屋に残されていたの。」

……生きた証。

この絵は、秋月さんが遺した、彼の生きた証。

込められた想いが、ダイレクトにわたしの胸を刺す。

なぜなら……これは、わたしへのメッセーじなのだから。

あのオレンジ色をバックに、必死に空に何かを求めするように、つかみ取るように伸ばされた右手。

何をつかみ取るうとしている？

決まっている。

『40%の未来』

この絵が、絵画として価値のあるものなのかどうかとは、わたしにはわからない。

ただ、何を伝えようとしているのかは、はっきりとわかる。

この絵は、わたしに『生きる』と言っている。

心の奥底で・・・何かはじけたような気がした。

『この怖いと思う気持ちを、どうやって乗り越えればいい？』

これが、その答えなんだ。

ただ、シンプルに・・・生きるしかないんだ。  
怖さを乗り越える必要はない。

その怖さとともに生きるしかないんだ、と。

まるで、ちよっぴり弱気になりかけたわたしに、秋月さんが活を入りにきたように感じられて、苦笑してしまう。

死の間際まで・・・わたしのことを救ってくれた。

そう思ってた。

でも、死んだ後まで・・・わたしを救ってくれるなんて、思ってもみなかったよ。

よく見ると、絵の右下に黄色で書かれたサインがあった。

いつか見たことのある、ちよっぴり下手なローマ字のサイン。

そのサインを見て、わたしの顔が自然に綻ぶ。

「この絵・・・もらってもいいですか？」

そんなわたしの問いに、新庄さんは満面の笑みで答える。

「もちろんよ。」

以前、スケッチを見せてもらった時と同じように、見覚えのある筆跡の日付とローマ字の名前。

そして・・・付け加えられた、もう一行。

気づいてたよ、わたし。

いつも、わたしのことを『キミ』って言ってたもんね。

だから、今、初めて名前を読んでもらえたような気がして、それが・・・ちよつとだけ嬉しかったんだ。

わたしは、もう一度サインを見て、顔を綻ばせた。

2009.9.17

kouta akizuki

for くるみ

## 最終話 ある晴れた日に

桜が舞う季節には、生命の躍動を感じる。  
だから、わたしはこの季節が一番好き。

窓の外から見える一本桜に、一陣の風が吹き抜けて、花びらが舞い散る。

そんな光景を、わたしは目を細めながら眺めていた。

川を挟んだ向かいの家は、すでに空き家。

美加の部屋だった窓には、もうカーテンすらなくなっていた。  
今となっては、もう美加に会うことはないだろう。

彼女のことは、今でも胸が「ズキン」とする思い出だった。

家の自室から窓の外を眺め、感傷的な気分に戻るわたしに、現実が襲い掛かる。

ふと見た卓上の時計は、午前8時を過ぎていた。

「いつけない！ 待ち合わせの時間に遅れるっ！」

一際大きな独り言を吐くと、お気に入りのピンクのカーディガンを羽織りながら、急いでドアを開ける。

そして、まるで、わたしを見送るように壁に掛けられた天使の絵に、いつもどおり「行ってきます。」をしてドアを閉めた。

駅。

約束の時間まであと5分。

ここまで、急いで来たので、心臓がバクバクいつている。

主治医の先生からは、気管支に負担がかかるような激しい運動は極

力控えるようにと言われていた。  
気をつけなきゃ。

わたしは、息を整えながら、待ち合わせ場所の切符売り場に到着した。

「おっそ〜い！」

聞き覚えのある元気な声が聞こえて、わたしは苦笑した。

「え〜、1分前だよ。間に合ってるよー。」

「アタシなんか10分前に来て待ってたんだから。9分待ちぼうけです！」

「いやいや、それはアンタの来るのが早すぎたからでしょうが。」

噛み合ってるんだか、いないんだか。

そんな会話を交わしてから、わたしたちは笑いあった。

赤い薄手のセーターに、ダークグリーンのデニム生地のジーンズ。  
初めて会った時は、肩にかかるくらいの長さだった髪は、今では背中まで伸びていた。

そんな長い髪を、三つ編みにして、緑色のリボンで結んである。

身長は150cmくらい。

わたしと、さして変わらないくらいだ。

成長期ってヤツだね。

ここ数年で、ずいぶん伸びたんだなあ、と思う。

そんなことを考えながら、わたしは彼女に声をかけた。

「それじゃ行こうか、美佳。」

「はーい。」

美佳は、素直に返事をして、一緒に歩き出した。切符を買って、電車に乗り込む。

目的地は県境を越えた、あまり名の知れていないハイキングコース。わたしたちの荷物は、スケッチブックとお弁当だった。

電車は比較的すいていた。

わたしたちは、手近な座席に並んで座り、おしゃべりを楽しむ。

わたしは、今春、王鈴美術大学の3年生になった。

将来は画家になりたい・・・というわけでもなかったが、描きたい絵があったので、その勉強のためだ。

そして、今年の2月に、わたしは20歳になった。

青い振袖で成人式に出席し、美佳と一緒に写真を撮ったりもした。

振袖を着る事が出来たことも嬉しかったけど、なにより、美佳が涙を流して成人を祝ってくれたことの方が嬉しかった。

その美佳は、今春から高校生だ。

名桜高校という県下では有数の進学校。

どうやら、美佳は頭の良い子らしい・・・。

そして、美術部に入部した。

多分、わたしの影響だろう。

そんなわけで、今日は一緒に絵を描くために、少しばかり遠出をしようということになったのだ。

電車に揺られること1時間弱。

目的の駅で下車すると、駅のすぐそばからハイキングコースに入る。

当然のことながら、上り坂が多い道。

美佳は、あの手術の後、今ではすでに常人と変わらない生活を送っているとはいえ、わたしと同じように激しい運動は止められている身なので、わたしたちは、オーバーワークにならないように用心しながら、休み休み登っていく。

10時半。

家を出てから約2時間半かけて、ようやくたどり着いた目的の場所。わたしたちは歓声を上げた。

「うっわあ〜！」

この小高い丘から一望する景色は、まるでジオラマのような街並みだった。

「絶景だねえ。」

美佳が、素直な感想を述べる。

「そうだね。」

「この風景を描くの？」

「そうだよ。」

あうう、という声が聞こえたような聞こえなかったような。でも、美佳の顔は、確実にそう言っていた。

確かに、この景色を全て書き留めようとしたら、街並みもすごく細かいし、相当に大変そうだ。

美佳が、「あうう」と言いたくなるのもわかる。

「まあまあ。この景色全部じゃなくて、一部分だけ切り取って描いてもいいし。気楽にいこうよ。」

わたしの慰めに、美佳は少しホツとした様子だった。

早速、二人並んでレジャーシートを敷き、体育座りをしてスケッチを開始する。

美佳は、まだ美術部に入部したばかり。

スケッチペンの動きがたどたどしかった。

コツを教えてあげながら、自分もスケッチする。

結構大変だったけど、それでも、昼時にはかなり出来上がってきていた。

「ねえねえ、くるみちゃん。お腹すかない？」

美佳は、いつの間にかわたしのことを『くるみお姉ちゃん』から『くるみちゃん』と呼ぶようになっていた。

そうなるきっかけがあった……んだけど、まあ、それはそれとして。

でも、確かにお腹はすいていた。

「あはは、そうだね。お昼ごはんにしようか。」

「やったね！」

そう言いながら、指をパチンと鳴らす美佳に、わたしはクスクス笑ってしまった。

わたしが作ってきたのはサンドイッチ。

美佳が作ってきたのはおにぎりバスケット。  
お互いに分けっこしながら、昼食を楽しむ。

「うー、満腹。」

美佳は、呻くように言うと、レジヤースhirtの上にゴロンと仰向けに寝転んだ。

「ころころ。食べてすぐに横になると牛になるよ。」

「いいじゃん。牛上等。」

・・・ワケわかんないよ。

そう言いながら、わたしたちは大笑いした。  
とりあえず、わたしも同じように仰向けに寝転ぶ。

「あー、くるみちゃんも牛だね。」

「どっちがおいしいだろうね。」

「そりゃあ、肉付きの良い方では？」

おどけた口調で言いながら、美佳はわたしの脇腹をつまんだ。

「ころころー!!」

わたしは、笑いながら怒る。

ダメだ。わたしは脇腹は苦手。

それを知ってか知らずか、美佳は執拗にわたしの脇腹を攻め立てた。  
こんな静かな山の中で、キヤーキヤー言いながら、ふざけ合っわ

したち。

そんなバカな食後の運動が終わり、笑いすぎたわたしたちは、息を切らしながら、仰向けに寝そべって空を眺めた。ようやく息が整う頃、美佳がゴロンとわたしの方を向いて話しかけた。

「ねえ。くるみちゃん。もうスケッチ出来た？」

「ううん。まだ出来てないけど。」

「ちょっと見せてよ。」

美佳は、時折バカなことを言ったりするけれど、基本的に向上心が旺盛だ。

美術部に所属したからには、絵がうまくなりたいと思っっているだろうし、そういう方面に興味を向かせてしまったのは、先に絵の勉強を始めたわたしの影響でもある。

だから、わたしは少しでも参考になればと思い、寝そべりながら手を伸ばして、描きかけのスケッチブックを差し出す。

・・・本当は、描きかけを見せるのは、すごく恥かしいんだけど。

「やっぱ上手だよねえ。くるみちゃんは。」

「それでもないよ。大学の友だちはもっとうまいもん。」

本当だった。

いつも構図の切り取り方でハツとさせられる人や、センスとしか言いようのないステキな色使いをする人もいる。

「でも、アタシよりずっとずっと上手だし。」

何故か口を尖らせる美佳に苦笑する。

「こんなに上手なら・・・もう『アレ』も描けるんじゃないの？」

唐突に美佳は言う。

『アレ』とは、わたしが大学でみっちり絵の勉強をして、最終的に描き上げたいと思っている絵のことだ。

秋月さんと初めて会った日に、手を繋いで眺めたあの夕陽。

もう、4年近く前の出来事になるけど、未だに記憶の中に鮮明に残っているオレンジ色の景色。

わたしは、その『記憶』を絵に描き留めたかった。

「ううん。まだまだ。もっともっと勉強しないと描けないよ。」

謙遜とかじゃなく、本気でそう思っている。

自分で100%納得がいかなきゃ意味がないから。

「でもさ、くるみちゃんは『今出来ることは今やる主義』だよな？」

20歳まで生きる可能性が40%。

でも、20歳になれたから、もう安心というわけじゃない。

これからも週1回の検査は続くし、発症のリスクだって今までと何も変わらない。

だから、いつ発症しても良いように（発症してほしいわけじゃないんだけど）やりたいことはドンドンやるようにしていた。

美佳は、多分わたしのそういう考え方を『今出来ることは今やる主義』と言っているのだろう。

そして、美佳は、わたしの病気のことも知っているから、心配もし

てくれているんだと思う。

「大丈夫。これは、わたしの『生きた証』なんだから。描かないうちは死ねないの。」

理屈になっていないといえば、確かに理屈になっていない。

でも、わたしも、生きた証を遺したかった。

秋月さんがそうしたように。

わたしは、空を睨みつけながら、決意表明をするように力強く宣言する。

「だから、おばあちゃんになるまで生きてやるんだ。」

「……。」

美佳は目をパチクリさせ、そして、次の瞬間には大声で笑った。

「もしもし。ソコ笑うトコじゃないんですけど?」

わたしは、美佳をジトリと睨んで聞く。

「だって……だって、くるみちゃんのおばあちゃん姿を想像したら……もう、ねえ。」

何が『もう、ねえ。』なんだか。

わたしは、相変わらず寝そべりながら、人差し指で美佳の顔を指差す。

「ちょっと美佳? わたしがおばあちゃんってことは、その頃には美佳も『お・ば・あ・ちゃん』なんだよ?」

美佳の笑い声が消え、『ガーン』という効果音が聞こえてくるかのような、『・・・あ。』という美佳の表情。

そんな芸術品のような表情の美佳の顔を見て、今度はわたしが笑う番だった。

なかなか笑いが止まらない。

そのうち、美佳も釣られて笑い出した。

二人の笑い声が、山の中に響く。

今、わたしは幸せなんだと思う。

でも、あまりに幸せすぎて、こんなに幸せでいいのかな？とも思う。

きつと、それでいいはずなんだ。

秋月さんは喜んでくれている・・・何故かそんな確信があった。

なんだろう・・・わたしと秋月さんとの間に感じるこの一体感は何

いや、この一体感を感じるからこそ幸せなのかな？

いつの間にか、二人とも笑うのをやめて、空を眺めていた。

そう遠くない空から、「ぴーひよろろ〜」というトビの鳴き声が聞こえ、なんだか時間がゆっくりと流れているような、そんな感覚がわたしを包む。

何気なしに目を閉じると、まぶたの裏に浮かぶ秋月さんの笑顔。

あれから、もう3年半以上経ったのに、記憶は決して色褪せない。

オレンジ色の夕景を見た時に繋いだ手の温もりも。

雨の中で抱き締め合った時に感じた広い背中も。

最後に交わしたキスの感触も。

多分、一生忘れることはないと思う。  
いや、忘れられるはずがないんだ。

・・・どうしてだろうね？

(それは、きっと・・・)

「ねえ。そろそろ続きをやるうか？」

ちよつと脳天気な美佳の問いかけに、わたしの思考が中断される。  
わたしは苦笑し、目を閉じたまま美佳に答えた。

「・・・もう少し。」

こんなに時間がゆっくり流れているんだから、もう少しだけのんびりしようよ。

そんなわたしの気持ちも、伝わったのかどうかわからないけど、美佳は何も言い返してこなかった。

ゆっくりと目を開くと、空を飛び回る鳥の姿が、目に飛び込んできた。

わたしは、珍しいものを見たかのように声を上げる。

「・・・あ。」

「・・・なに？」

「鳥が飛んでる・・・。」

美佳は、「フフフツ」と笑った。

「なあんだ、鳥か。」って思ったのかもしれない。

でも、そんな態度を見せることなく、美佳は話を合わせてくれた。

「ホントだ。・・・どこに飛んでいくんだろっね。」

美佳は・・・本当に優しい。

だから、ちょっと年は離れているけど、『親友』でいられるんだ。

そんなことを考えて、少し照れてしまったわたしは、冗談めかして答える。

「・・・未来・・・かなあ。」

「へんなの〜」

美佳は、ケタケタ笑った。

わたしも、可笑しかったので、一緒に笑った。

青空の向こう・・・遙か彼方に向かって飛んでいく鳥。

高く・・・高く・・・。

気持ちよさそうに。

やがて、それは見えなくなってしまったけど、それでもわたしは空を眺め続けた。

澄み切った青い空と、忙しく形を変えながら流れていく白い雲。みんながのんびりしているのに、なんだかあの白い雲だけ忙しそうにしている感じだ。

わたしは、心の中で「慌てなくていいのに。」と呟きながら、目を細めた。

草原に寝そべるわたしたちを、舐めるように吹き抜ける風が、草木をザワザワと揺らしていく。

木々の梢から聞こえる鳥たちのさえずりは、まるで極上のBGMだ。今は、もう少しだけ、この澄み渡った春の青空と、忙しげな白い雲を堪能しよう。

生きている今を・・・この幸せをかみしめながら。

生きるって、ステキなことだね。

わたしは、心の底から・・・そう思った。

## 最終話 ある晴れた日に（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

自殺を考えていた主人公『塚原くるみ』の、最終話に至るまでの心境の変化に、思いを馳せていただければ、大変嬉しく思います。

また、今後の参考のため、この作品の『良かった点・悪かった点』などの書き込みを、ぜひお願いいたします。

では、また次回作でお会いしましょう。

作者：じえにゆいん

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8501h/>

---

40%の未来

2011年7月17日00時50分発行